モンスターハンター～エピソード
ド ココット～

Patrick

ココット村のハンター、クライン・クルーガーの物語

MHP時点での設定です。オリジナルモンスターとかは出さず、原作に忠実に物語作っていきます。

目次

- 第1話 これから始まる物語は
第2話 火竜強襲！
第3話 赤き怪鳥を狩れ！
第4話 サボテンの花を求めて 『前編』
第5話 サボテンの花を求めて 『後編』

第1話 これから始まる物語は

（登場人物紹介）

・主人公

名前…クライン・クルーガー 15歳

武器…ハンターカリング

防具…ハンターシリーズ

《ココットの英雄》という伝承がこの世界に残っている。

伝説の片手剣使いとして知られる彼の者は7日に渡り巨大な一角竜との死闘を繰り返して、その果てに一角竜を打ち破った。その一本の角を持ち帰った彼は次第に『ココットの英雄』と呼ばれるようになる。

また、山程の大きさの古龍を退けた数少ないハンターとしても知られる。しかし彼は巨大龍の討伐の際、大事な婚約者を一人亡くしてしまった。

5人で討伐に向かい、不幸にも命を落としてしまった英雄の婚約者。それ以来、原則として4人で狩りに行く決まりが出来た。

彼が現在のハンター業に与えた影響は大きい。

一角竜の狩猟は原則として単身で挑むというもの。集団で狩りに出る場合は4人までが原則。

現代では一般的と言われるハンターのルールは彼が元祖だと言われている。

しかし、そんな伝説の英雄である彼も、本心では1人のハンターとして見てほしかったようだ。

そんな英雄がハンターの拠り所としてシュレイド地方の南西部《ココット山》の麓に《ココット村》という村を築いた。

隣接するアルコリス地方には《シルクオーレの森》と《シルトン丘陵》という大自然の狩場が存在し、ハンターの間では通称して《森と丘》と呼ばれている。

丘には草食種のアプトノスや鳥竜種であるランポスなどが生息し、奥に行くほど危険度は増すため、ベースキャンプからほど近い丘では、初心者ハンターが狩りのノウハウを学ぶのに適した場所となっている。

非常に生息域が広い地域ゆえ、様々な飛竜種が飛来することから、時期によっては一部のハンターにしか開放しない場合もある。

狩場はそれぞれブロックごとに分けられており、1、2、3と番号が振られている。エリアとも呼ぶハンターがいる通り、それらはギルドが設けた狩猟可能な場所として、各ハンターはそのエリア内での狩猟を許可されている。

この物語の主人公《クライン・クルーガー》はそんな森と丘の1のエリアで、アプトノスの生肉集めに来ていた。

—森と丘 エリア1—

ハンターナイフを力一杯振り回して、アプトノスの横腹付近を斬りつける。

もともとあまり切れ味が無いため、斬りつけるというよりも殴りつけるという表現の方が正しいのかもしれないが。

何回か斬りつけると、アプトノスは断末魔の声を上げ地面に倒れた。周りにいた仲間のアプトノスはそれを見るや、危険と察知したのか、川の向こうの陸地へと逃げた。

川の向こう側は狩猟地に認定されていないため、追うことはできない。だがこれ

で十分だった。

「生肉2つ。こいつだけで十分だ。」

クラインは今受けている依頼は『生肉2つの納品』という依頼だ。

初心者ハンターが最初に受注する依頼ではあるが、クラインはこの依頼をすでに半年ほど続けている。

「なんだって村長は俺に討伐の依頼を回してくれないんだ。」

そう愚痴をこぼしながら、クラインは器用に剥ぎ取り用のナイフでアプトノスの肉を剥ぎ取る。必要な分だけ剥ぎ取りそれ以外は残す。村長から教わったハンターの掟だ。

ハンターは言うなれば命を奪う仕事。しかし、自然への感謝を忘れてはならない。モンスターの死体は腐敗し自然に変える。そして生命は回っているのだ村長は言っていた。言っている意味がよくわからなかったが、クラインは生命の重さというものについては理解しているつもりだった。

クラインの両親はハンターだった。父親はランス使いで、母親はライトボウガンを使っていた。両親がハンターのクラインではあったが、特に英才教育を受けてい

たということはない。なぜならクラインの両親はクラインが5歳の時、命を経ったからだ。

火山の飛竜を討伐に行ったきり戻ってこなかったクラインの両親。モンスターに返り討ちにされて、命を経ったのだ。

まだ5歳だったクラインは、突然いなくなつた両親を悲しんだが、今となつてはその気持も薄れた。クラインが薄情な性格というわけではない。ハンターという職業柄、死とは常に隣り合わせだ。

狩猟は狩るか狩られるか。

クラインの両親は狩られる側に行つてしまつただけで、それも自然の摂理だった。しかしそれを理解できたのもここ半年ほどのこと。ハンターになつてからだった。

まだ大型モンスターを狩つてはいないが、こうやって生肉を取りにアプトノスを狩っていると思う。

アプトノスの群れの中には、稀に小さい幼体のアプトノスもいる。クラインが先程狩つた個体は大きな成体のアプトノスではあったが、きっとそいつにも子供がい

たのだろう。

そういうことを考えていると、クラインの両親が死んだのも、致し方ないと言える。

「帰るか」

生肉を大きめのポーチの中にしまい、クラインはベースキャンプへ続く坂を登る。狩場にはそれぞれベースキャンプというハンターの拠点となるエリアが存在する。それらはギルドが設けた簡易的なキャンプで、ギルドから支給されるアイテムがしまつてある支給品ボックスや、採取依頼のアイテムを納品する納品ボックス。体力を回復させるための簡易ベッドなどが設けられている。

依頼を受けたら基本的にはこのベースキャンプに降ろされて、仕事を開始するのが主な流れだ。

ベースキャンプはモンスターが入り込めない、または近寄れない場所に設置されるので、狩場唯一の安全地帯だと言える。森と丘のベースキャンプは岸壁と木々に囲まれた空間にある。空中は空いており、木々に遮られて日が差し込んでいた。

奥には水辺があり、魚が生息しているので釣りもできるようになっていた。

「よいしょっ」

生肉を納品ボックスに入れて依頼完了だ。

後は迎える荷車が来るのを待つだけである。これが一連の依頼の流れ。クエストとも呼ばれるハンターの仕事を通称する時に使う言葉だ。

ハンターの仕事は様々で、生肉などアイテムを納品する納品クエストや、モンスター討伐を依頼される討伐クエスト、その他ギルドから個人、もしくは特定のパーティなどに出される緊急クエストなど、様々だ。

クエストにはそれぞれ依頼主がいて、依頼主がギルドに依頼金として計上したものを仲介料を差し引いたものが直接ハンターに報酬金として貰える仕組みになっている。

クエストにより報酬金が上下し、難易度の高いものほど、報酬金は上がっていく。今回の生肉納品の依頼はココット村村長から時期に依頼されたものだった。

「どうせ村長のご飯だろ・・・」

空を仰ぎ見て、クラインは迎える荷車が来るのを待った。

—ココット村—

「フォツフォツフォツ、クラインやありがとう」

生肉を渡して、村長は自分の家の奥へと入っていった。

「やっぱり自分で食べるんかい」

残されたクラインはその弱々しく歩く背中を見送った。

本当に目の前の“あれ”がかつて《ココットの英雄》と呼ばれた伝説のハンターなのだろうか。そもそもすでに何十年前の話。今や《ココットの英雄》の話は吟遊詩人らが語り部となり、話の端々を誇張、もしくは改変して伝えているに過ぎない。目の前の村長はそんな英雄の話を自分から話そうとしないので、誰も本当のことを知らないと言ってもいいくらいになっている。

そもそも、そんなにすごいハンターであるなら、なぜこんな何もない場所に村を立てたのか。

ココット村からほど近い場所にはミナガルデというギルドの本拠地がある大きな街がある。英雄と称えられる人物であれば、街に移り住んで何不自由ない生活が送れると、クラインは考えていた。

「ところでクラインや」

薄暗い部屋の奥から現れる姿は、まさに幽霊そのもので、少し不気味な雰囲気を感じた。

「なに？」

「ほれ」

家の中に入ったのは、何も生肉を置いてきただけではなさそうだ。戻ってきた村長の手には、1枚の羊皮紙があった。この羊皮紙はギルドが発注している依頼用紙のものだった。

クラインは村長が突き出したその羊皮紙を手に取り依頼内容を確認する。

「ドス・ランポス・・・？」

その羊皮紙にはドスランポス1頭の討伐依頼という内容が書かれていた。

「もしかして・・・！」

「どうじゃ？そろそろ討伐依頼を受けてもいいじゃろ」

「ありがとう！村長！やっただよ・・・！」

「準備はできておるか？」

「準備・・・？」

そう言い首をかしげるクライン。

そもそも、今のクラインの財力では罫を揃えたり、閃光玉などの補助アイテムを入手することが難しい。もっと言うとな敵の動きを予想してイメージトレーニングでもすればいいのだろうか？と言ってもクラインにとってこれが最初の討伐になるので前知識なんてあるはずないし、この村でまともに大型モンスターと対峙してるハンターなんてたったの1人だけ。

しかもそのハンターは今、ミナガルデまで出ているため村にはいない。

一体何をどう準備すればいいのだろうか・・・。

「お主、ただ生肉を集めていたわけではなからう？」

その言葉を言われて思い出した。クラインは村長の依頼をこなすたびに、毎回のように森の奥地にある採掘場所で鉱石を集めていたのだ。と言っても元々は村長の助言によるもので、これから装備の強化などに鉱石は必須になってくる。だから今のうちに集められるものは集めておけと言われていたのだ。

「フォツフォツフォツ。わしが言っておいてよかったのう。どれ、今すぐ集めた鉱石を持って、加工屋に行ってみてはどうじゃ？」

—森と丘—

岸壁と木々に囲まれた微かな空間を、優しい風が吹き抜けてゆく。武器や防具に身を包んでいなければ、ピクニックに来たのかと勘違いしてしまうほど、のどかな雰囲気を感じる。

クラインは念入りに装備の手入れをしていた。手には昨日と比べると見た目が変わらない片手剣 《ハンターナイフ改》が握られていた。

昨日、村長に言われてそのままの足で工房に向い、すぐさま武器の強化をお願いした。同時に、今までの《レザーシリーズ》の防具から《ハンターシリーズ》へと買い替えて、おかげで肉納品の仕事で貯めに貯めたお金と貴重な鉱石類は一瞬のうちには消えてしまった。

しかし、これで立派にハンターらしい姿になった。

「よっし、気合入った」

改めて装備の緩みや武器の刃こぼれが無いかを確認する。支給品ボックスから地図や回復役、携帯食料を取り出す。

「これあんまり好きじゃないだよなあ」

そう呟きながら、クラインは携帯食料を頬張る。この形態食料はお世辞にも美味しいとは言えないものではあるが、空腹を満たすには十分な栄養素はある。と言ってもこんがり肉を焼いて食べたほうが断然いいのだが。

あいにく今日は肉焼きセットは持ってきてきてない。単純にかさばるので、戦闘中は邪魔になってしまう。それに今日は討伐がメインだ。

「待ってる。ドスランポス」

ベースキャンプを出て、坂を下っていく。いつもならアプトノスを狩って肉を取るところだが、今日は完全にスルーだ。狩りの対象とならないと、なんとも可愛らしい生き物だと思う。アプトノス自体、普段は温厚なモンスターで滅多なことでは人を襲うことは無い。

自分たちもアプトノスに荷車を牽引させて狩場まで移動している。

それ故に何かと関わりの深いモンスターではある。

アプトノスが生息する丘を抜けると、ランポスがたむろする丘に出る。1エリア隣り合わせになってはいるが、このランポスは決して先程の丘の方に出てこない。アプトノスはランポスの標的ではあるものの、やはりある程度の縄張り意識のよう

なものはあるのだろうか？

ランポスは鳥竜種に分類されるモンスターで、青と黒のストライプの鱗と黄色い嘴が特徴だ。今回の標的である《ドスランポス》をリーダーとして主に集団で行動している。一匹相手だと対したことはないのだが、やはり集団で襲ってくると非常に手を焼く相手だ。そしてその群れを率いるボス《ドスランポス》。

通常のランポスとの違いは、まずは大きな巨体。群れでいると一目瞭然だが、通常のランポスよりも一回りは大きい。それに付随して大きな嘴の中の牙と、長く発達した爪で標的を仕留めてくる。そしてなによりも目を引くのが大きな赤いトサカだ。その大きなトサカがランポスのボスである《ドスランポス》の証だった。

そんな丘の中腹に、ひと際目の引く大きなランポスが佇んでいた。

「いた・・」

ランポスの集団の真ん中に大きな赤いトサカを冠したドスランポスがいた。その佇まいはまさにボスという雰囲気醸し出しており、クラインは若干怖気づく。

首を上げ、無機質な表情を浮かべあたりを見渡すと、一頭のランポスがこちらに気づいた。途端、声を上げ侵入者の来訪をボスに告げたようだ。

ランポスにも言語が存在するのだろうか。一頭のランポスが声を上げると、一斉にクラインの見た。真ん中に鎮座する赤いトサカを持ったドスランポスもクラインに気付いた。

いよいよ狩猟の開始である。

—*—

何回切りつけたことだろう。何十、何百と腕を振って剣をその巨体にめり込ませていく。クラインの2倍はあろうかと思うほど大きな巨体に剣を振るう。次第に重く鳴っていく腕と、斬りつけるというよりは叩きつけるという表現が合うほどに剣はナマクラと化していた。通常、狩猟が長引けば剣は刃こぼれをおこし、研がなければならぬのだが、今のクラインには研ぐのに一旦引き下がるというスキが無かった。

そもそも、これだけランポスに囲まれては、背を向けて逃亡もできない。それよりも一撃でも多く攻撃を加えて敵を撃退した方がいいという思考が勝っていた。防具にはドスランポスの爪痕が刻まれていき、かすかにクラインの体力を削っているのがわかる。最初にあった恐怖心はすでに麻痺したのだろうか。今は目の前の敵の

攻撃を避けては攻撃を加えるの繰り返し。きつと飛竜であればこんなお粗末な戦い方をしてはすぐに命を落とすことだろう。

『そういえば自分はなんでハンターになったんだっけ？』 クラインはふと、自分がハンターとして生きていこうと決意した日のことを思い返していた。今から10年前、クラインがまだ5歳のころだ。ハンターだった両親が無くなったと聞いたのは、クラインが1人家で朝を迎えた日のことだった。鎧竜《グラビモス》を討伐に火山に向いた2人だったが2人は依頼に失敗し、遺体はついに発見されることは無かった。グラビモスに食われただろうとも言われていたが、鉋物を食べるグラビモスは人間を食べることは無いだろうという村長の言葉から、マグマにでも落ちたのだろうクラインは悟った。

両親が死んで悲しい。それもあるが、それ以上にこの世の底知れぬ恐怖を知ってクラインは怖くて泣いたのを覚えている。それから誰ともしれずハンターになると決めていた。モンスターに破れた両親。その存在はもう溶岩の中にある。つい最近まで一緒に暮らしていた両親をいともたやすく奪った自然の恐怖。それらを5歳の時に感じたクライン。

それからというもの、モンスターと対峙する時に自然と恐怖心は無くなっていた。それもハンターとしては良いことなのかとクラインはわからない。少なくとも目の前の凶悪な敵に対して恐怖心は無いとクラインは思っていた。

目まぐるしく流れる思考の渦の中、クラインは敵の動きがゆっくりなことに気がつく。

『そう言えば人が死ぬときって……』

—ココット村—

温暖な気候に囲まれたココット村は、季節によっては綺麗な桜が舞う村だった。そういえばクラインの両親が無くなったのはちょうど桜が吹く日だったかと、ココット村の村長は緑に生い茂る大木を見つめながら思っていた。村長の背より少し高い位置に、立派な装飾の盾が飾られており、その下、大きな岩には一本の剣が刺さっている。ココットの英雄の話と付随する形で、この剣の名前も村の周りでも広まっていた。

《ヒーローブレイド》

かつてココットの英雄が使っていたとされる剣で、逸話の一つにはドラゴンの額

に突き刺さり抜けなくなったとされている。

盾と剣がセットになったいわば片手剣の分類されるその武器は、いまはココット村のクラインの家の裏の大木の下にあった。その剣を見つめながらは村長は古い記憶をたどっていた。

《クルト・クルーガー》それがクラインの父の名前だった。

名の知れたランスの使い手で、ミナガルデから王都にまでその名を轟かせていた。彼はココットの英雄の話を知り、この村に移り住んできた。その時はすでに結婚し、クラインも1歳だった。

クルトはすでに数多の飛竜を狩り、ハンターとしての腕前はすでに一流だったとされている。ミナガルデでハンター業を続けていたが、結婚し子ができたことにより、より環境の良いココット村に引っ越ししてきた。

村に来てからの彼の貢献度はそれは凄まじいものだった。近隣のモンスターのハントや商人との交渉、流通の拡大。すでに隠居した村長の手足のごとく、よく働きまわった。

クルト自信、ココット村を気に入ってただけに、力になれているのが嬉しかった

ようだ。そうやって徐々に村になれて3年が過ぎた頃、クラインも物心がつき、子育てに一段落がついた頃、妻である《カミラ・クルーガー》もハンターとして復帰した。

現役の頃は、前衛に行くクルトの援護をするためにとライトボウガン愛用していた。

夫婦揃って狩りに出かけるようになり、より村の復興は進んだ。そしてクルトがココット村にいるという関係からギルドから直接高難度の依頼も舞い込んでくるようになってきた。

ハンター社会と言われる世の中ではあるが、実力のあるハンターはそうそういない。ギルドが設置されているミナガルデでも、腕利きのハンターは数えるほどしかないのだ。その1人が《クルト・クルーガー》だった。

そしてそんなクルトの元に舞い込んできたのが件の鎧竜《グラビモス》の討伐依頼だった。火山近くの村に危害を及ぼしているということで緊急を要する依頼だった。クルトとカミラは両人ともグラビモスの討伐経験はあったのでこれを了承。油断はできないが、決して難しい仕事では無いと誰もが思っていた。そして狩場へ赴

いた数日後、彼らの訃報がギルドから伝えられた。

それは村の誰もが驚いた。村長自信そうだった。そもそもクルト自信、身の安全を優先して狩りに挑むスタイルで今までいくつも仕事をこなしてきた。深追いはせず、冷静に場の状況を判断し続行可能か否かを判断できる男。そういう判断を含めて全幅の信頼を寄せられる人物だった。確かに狩りに完璧なことは無い。むしろ不都合なことばかりだ。それでも、あの2人が無くなるなんてことはにわかには信じられずにはいた。

ギルドはすぐさま代わりのハンターを要請しグラビモスを討伐した。その個体はとても衰弱しており、腹の甲殻は割れ、尻尾は切断されており、すでに瀕死間近だったのだろうと見てわかるほどだったとのこと。

その後、ギルドは彼らの遺体が腹の中にあると断定しその個体を解剖し調べたが、胃の中に人間の部位は一つもなかったという。そもそも鉱物を食料とするグラビモスは人間を食べる習性は無いのだという。

彼らはグラビモスの攻撃により火山の溶岩の中に消えてしまったのだろうと思っ
た。

狩りに不足の事態は付き物だった。村長もかつての知り合い、顔見知りか狩場に
出向いてから帰ってこなかったことも幾度も経験している。

それでもわずか5歳の子供を残して逝ってしまった2人に対して同情以外の念
が湧いてこないのも事実だった。両親の死を知った5歳だった子供は、今や立派
にハンターとしての道を歩みだした。両親の死から立ち直ってしばらくしてから、
突然自分もハンターになると言いだしたクライン。

親の仇という風ではなく、もつと別の感情がその目に宿っていたのを、村長は感
じていた。

「そう言えば自分がハンターになろうとしたきっかけはなんじゃったかのう・・・」
かつての愛器を前に、確認するようにそうつぶやいてみせた。村長は元相棒の剣
に祈るように、クラインの無事をただただ願っていた。

『ゆくゆくは偉大な父をも超えるハンターに・・・』

そんな願いも一緒に込めながら

―ベースキャンプ―

振動とともに、猫のニャーニャーという声が聞こえてくる。それも音源は一つで

はなく2つ3つ、いや四方から聞こえてくるようだ。猫の声と合わせるようにガタガタという振動も心地良い。寝心地も家のベッドほど柔らかくないが、悪くはない。布一枚の上に寝ているようだが、今はこれが気持ちいい。振動が腕に響いて、痛みが走るが今はこのままがいい。

猫の声が反響するようになってからしばらく、ベッドから突き落とされるかのごとく、クラインは地面にほっぴり出された。

「いてっ！」

同時に鈍い痛みが身体全体に響き、意識がはつきりとした。

ニャーニャーという声とともに、ベースキャンプから外へと続く穴へと帰っていく。アイルーが見える。4匹のアイルーは荷車を引いているようだ。なるほど、これがネコタクか。クラインは納得し自分の状況を静かに考察した。

ギルドは依頼中に出た負傷者、もしくは立ち上がれなくなったものをベースキャンプまで運んでくれるアイルーを雇っている。ハンターを荷車に乗せて安全な場所まで運んでくるアイルーのことを通称ネコタクと言ったりする。

彼らはそれなりにモンスターとの対峙の心得を知っているようで、どんなモン

ターだろうと負傷したハンターを助け出し救助してくれるらしい。アイルー自体、人語を操る猫くらの認識だろうが、狩場に出ているハンターにはよくわかる。彼らは非常に戦闘能力は高く、そして俊敏な動きでハンターすらも翻弄する。

最も温厚な彼らだから、よっぽどのが無い限り襲ってはこないのだが。近類種であるメラルーが最もハンターが手を焼いている存在だ。

「負けたのか・・・」

木々が生い茂ったベースキャンプから空を仰ぎ見る。地面について防具を見ると昨日作ったばかりなのにすでに傷がついていた。それほどドスランポスの爪は鋭いのだろう。防具が無かったら今頃どうなっていたのだろう。

アプトノスを相手にするようにひたすら切りつけていれば倒れるものだと思っていたが、そうはいかないようだ。改めて先程の戦闘を思い返してみる。なんども周りのランポスにも追撃を食らわされ、ふっとばされてわ、目の前に躍り出てボスであるドスランポスを狙っていた。それがよくなかったのか。彼らはモンスターだがそれなりに敵を追い詰める頭は持ち合わせているようだ。

空を眺めながらその青さにドスランポスの表皮を重ねる。

『奴らの動きは個々はヒットアウトエイ。しかしそのスキを群れの多さでカバーしている』

クエストは基本的に3回力尽きたら失敗とされている。これは後続のハンターに依頼を回すためと無駄な死を重ねないためである。深追いは良くないことを先人はよく理解していたのだろう。それからギルド全体では3回までとしている。最も時間も決められていたので、それ以上の続行も不可能。それも失敗となる。回数については先程来たネコタクが管理しており、3回運んだ時点で失敗と判断される。一度ベースキャンプに追い返される度に報奨金が減るのはこのネコタク使用料だと村長が言っていた。まさか自分が利用する羽目になるとは。

これ以上、失敗はできないと考えクラインは冷静になった頭を働かせてドスランポスの動き、周りのランポスの動きについて考察する。

クラインの長所は冷静に分析、考えることだと村長が言っていた。どの角度で攻撃を加えればアプトノスは倒れやすいのか、以下に美味しい肉が取れるかを考えて狩りをするようにしてきた。気がついたのは村長に指摘されてからだ。

生肉調達、こんがり肉調達の依頼をこなして、ある程度狩りについてを知ってき

た頃、得意げにクラインが語りだしたのがきっかけだった。

『お前はちゃんと考える頭を持っている。力で制するタイプが多いハンターの中ではとても貴重な存在じゃ』

それを褒め言葉と受け取ってから、クラインはより頭を使って狩りを行うようになった。最もアプトノスのみではるが。

切りつけたときの感触により、モンスターには肉質が柔らかいところと硬いところが存在する。それと付随してある程度、敵に対しての行動パターンが備わっているらしい。それはこの厳しい野生を生きていく中で本能的に備わったものだと思っている。どう対処すれば敵が怯むのか、自分の武器は何か？

少なくとも先のドスランポスとの戦闘で確信したのは、自分の長所や短所を補う頭脳はモンスターには備わっていると思った。

クラインは薄れている記憶の中、ドスランポス及びランポスの群れの行動を思い返す。

基本は群れを率いてドスランポスを筆頭に攻撃を仕掛ける。爪によるひっかき、嘴による噛みつき。

それらを組み合わせる攻撃をしてくる。距離が空けば跳躍して比重とスピードに乗せた爪による突進攻撃のようなもの。これが一番ダメージが大きい。ただ、予備動作はわかりやすいので避けることはできる。

しかし、ドスランポスとの距離が空いても周りのランポスが攻撃を仕掛けてくる。これに気を取られているとあつという間にドスランポスの跳躍攻撃の餌食になりやられかねない。クラインはおそらくこれにやられてものだと思う。

最後の記憶は遠くから跳躍するドスランポスと次に来た大きな衝撃だったからだ。

「こればかりは考えても無駄かな・・・」

空きが見つからない群れの連携攻撃を、確実に一つひとつ対処していくのは困難と考えたクラインは、そこで至高を辞めた。

ふと、走る体力も無いことに気が付き支給品ボックスの方へと歩み寄る。

ギルドから支給される物品の中には、応急薬や携帯砥石、地図や食料などがある。ただどれも最低限の数がしかなく、ほとんどのハンターが自前で回復薬などを持ってきているのが実情だ。

クラインはその中の携帯食料に手を伸ばす。お腹が空いた時はこんがり肉を食べたいところだが、今のクラインは肉焼きセットを持ち合わせていない。なるだけ持ち物は少なくしようと思った結果、武器よりも多く持ったであろう肉焼きセットを置いてきていた。

「あんまり美味しくなんだよなあ」

文句をたれながらもクラインは携帯食料を頼張る。支給品用の携帯食料は長期の保存がきくように作られており、長期保存しても問題ないように作られている。その分、味は落ちるがスタミナ回復を優先して作られているため、栄養補給には申し分ないほどだった。最も一昔まえよりかは味は良くなっているらしい。そもそも味がまずければ誰も食わずにそれこそ本末転倒だからだ。

支給品に入っていた携帯食料3つをすべて平らげて、クラインは意を決した。「次戻ってくるのは、ドスランポスを倒してからだ」

—エリア10—

通称、森と丘と呼ばれる狩場はシルトン丘陵とシルクオーレの森により構成される狩場だ。見晴らしの良い丘とは相対し森の中は非常に視界が悪くなる。獣道が出

来上がっているも、木々が生い茂り非常に視界が悪いため、このエリアを嫌うハンターも多い。クラインも例に埋もれず、鉱石採掘にこの奥地に訪れる以外、ほとんど来ることは無かったため、まったくというほどなれていない状況であった。その森の中、小さな水場の近くにドスランポスがいた。その周りに3頭ほどランポスが固まっている。常に何頭か率いて行動をしているよう基本的に一頭での行動はしないらしい。

幸いにもこの深い森の中のため、モンスターにも発見されにくいだが、逆に反撃の機会を得られるずにいた。

躍り出て一気に戦闘に持ち込むのもいいだろうが、今回は真正面から飛びかからずに周りのランポスを一頭一頭狩り最後にドスランポス本体を叩く作戦を立てていた。なるだけドスランポスによる発見を送らせて一頭でも多くランポスを狩る。おそらくすぐに増援が湧いてくるだろうが、それでも先手をとって敵陣に飛び込めばマウントは取れたようなものだった。

しかし、こうも群れで行動されてはなかなか攻撃の機会が見受けられない。クラインは木陰からひっそりと息を潜めてドスランポスが率いる群れを観察していた。

野生で生きてきた性質か、自分は水場で給水をしている最中も周りのランポスに警戒をさせているようだった。こう見るとモンスターもある程度頭を使えるのだと思っただ。

ゆっくり慎重に木々の影からクラインはランポスの動きを見張っていた。ゆっくりと距離を近づけようと思い、低姿勢のまま一歩進み出た時。

パキッ

地面に落ちていた小枝を追った音が森のなかに響き渡る。

一斉にランポスの群れがこちらに向いたかと思うと、ランポスの集団はドスランポスを含め一気にこちらに迫ってきた。

クラインの心臓の音も森のなかに反響するのではないかと思うくらい跳ね上がり、迫り来るモンスターの群れを見て、クラインは腹を括った。

ドスランポスが後を追う形で自分のランポスが迫ってくる。このランポスの猛攻の後に、ドスランポスが跳躍で飛んでくるはずだ。

そう思い、ランポス一頭一頭に確実に攻撃を当てながら、奥にいるドスランポスにも気を払う。

ドスランポスはこちらに人吠えした後に姿勢を低く構えた。

『あれは跳躍の体制・・!!』

ということは一——。

直後、ドスランポスが跳躍し、その時の鳴き声でランポスの群れはクラインの周
囲から散った。そしてその真ん中にはクライン。

急降下してくるドスランポスだが、しかしクラインはその位置からすでに移動し
ており、わずかにずれた位置にいた。それはドスランポスが着地した場所の真横。
周りのランポスが距離が取り、空間になっていた場所だった。

クラインはドスランポスが着地するタイミングに合わせて思いっきり剣を振る。
一撃、二撃、三撃。確実に攻撃を与えてダメージを稼ぐ。幸い、ドスランポスは
それほど頑丈ではなく、一撃与えるたびにギャーギャーと鳴き、怯む様子を見せる。
クラインはこの大きな跳躍後のタイミングを見計らっていた。

ドスランポス達の攻撃連携は基本的にヒット&アウェイ。ドスランポスが攻撃の
手を休めると、周りのランポスが攻撃を加える。逆に回りのランポスの攻撃が止ま
るとドスランポスからの攻撃がくる。隙をみせない連携になっているが、唯一この

跳躍のタイミングだけは大きな隙ができる。大きな動作によるものだろう。周りのランポスも攻撃に巻き込まれないように十分に距離をとろうとする。そこを狙ったのだ。ドスランポスはある程度距離があくとこの跳躍により距離を詰めるのと攻撃を同時にする。その習性をクラインは見逃していなかった。

そして形勢は逆転していく。今まで受け手に回っていたクラインだがこの攻撃を氣に一気に攻撃へ転じる。ドスランポスが一方的にやられていくと、周りのランポスは攻撃をしてくる。しかし、ドスランポス自体、大きくないおかげでドスランポスに与えた攻撃をそのまま周りのランポスに食らわせることができた。

ランポス1頭1頭は強くない。だからこそ群れで挑んでくるのだ。徐々にドスランポスは連携の動きに戻ろうとするも、そのころには周りのランポスは地面に伏していた。おそらくまだ森の奥に仲間がいるのだろうが、呼ばれる前にこのまま押し切る。

その勢いでクラインはドスランポスの動きに気を配りながら攻撃を与えていく。返り血により剣の刃がこぼれてきたようだが、確実に相手のドスランポスが弱ってきているのがわかった。

「やあああ！」

腕に精一杯の力を込め、剣を振るう。ドスランポスの表皮を割く感覚が剣先から伝わり骨に当たる。そのままクラインは切断する勢いで思いつきり剣を振り抜いた。

その瞬間、ドスランポスは大きく吹っ飛び、クウ・・という弱々しい断末魔の声を上げながら絶命した。

クラインの周りには青い鳥竜種の死体が山程転がっていた。

—ココット村—

村に帰ってきたクラインを見やるやヒゲに隠れた口元が笑っているのがわかった。今でこそ年老いて弱々しい印象しか感じないが、これでもかつてのココットの英雄だ。

クラインはこれまで狩人における数々の心得を教えてもらっていた。アプトノスを狩るだけの依頼をこなしているだけだったがそれだけでも、色んな事を村長から教わった。

ただ、その時は言葉一つ一つの意味はわかっていなかった。命を還すということ

の意味。

今日、ドスランポスを狩った後、クラインは狩ったモンスター1頭につき一回しか剥ぎ取りをせずに帰ってきた。ランポスの青い皮はすごく綺麗で家に持ち帰って飾るのもいいと思った。

それが彼らの生きていた証になるのだろうかと思い、クラインは綺麗に皮を剥ぎ、一頭からは爪を取り牙も取った。そうやって各部位を一頭ずつ取っていき、最後にドスランポス。

さすがに自分用の素材と狩った証となるトサカは持ち帰る必要はあったが、それでもドスランポスの亡骸は森の隅の方に移動させた。

きっと他のモンスターの餌となるだろう。それともそのまま土に帰りその地を形作る土壌となるだろうか。

他者を狩るハンターという職業は、人より一層自然に対して向き合わないと行けないということ、今回のドスランポス討伐で学んだ。

それもまた、成長と言うのだろう。

ドスランポスが絶命した後、静けさに包まれる森の中で、クラインは命のやり取

りを終えた後の余韻に浸かっていた。

気絶したあの瞬間、一歩間違えれば、自分がこうして地に伏していたのだろう。もう二度と目を覚ましていなかったのかも知れない。

手の中には未だにドスランポスを切った感触が残っている。

罪悪感に包まれたわけではない。はじめての大型の討伐で達成感を感じている。しかし同時に、ハンターとして歩みだした自分の未来に対してそのない何かを感じていた。

それは絶望や虚無のようなものではない。この世界の途方もない広さを感じていた。両親が戦ったというグラビモスはドスランポスの比ではないくらい大きいのだろう。そんな相手と相対するのはどんな気持ちなのだろうか。

「どうじゃった？ クライン？」

眼の前の村長がクラインに話しかけてくる。

狩りの結果はどうだったのか？

そう聞いている村長の目線はクラインの右手に握られている麻袋に向けられている。微かに飛び出して見えるドスランポスの赤いトサカ。それを認めて村長はわ

かって聞いているのだ。

村長はこういう性格だ。

「ほら」

村長の眼前にドスランポスのトサカが入った麻袋を向けてクラインはかすかに口元を緩めた。

第2話 火竜強襲!

〔登場人物紹介〕

・主人公

名前…クライン・クルーガー 15歳

武器…ハンターカリング

防具…ハンターシリーズ

名前…マハト・アルペンハイム 16歳

武器…バスターブレイド

防具…ランポスシリーズ

ギルドでは《森と丘》と呼ばれる狩場がある。

《シルクオーレの森》と《シルトン丘陵》で成るその狩場は、多様な生態系が特徴で様々なモンスターを確認することができる。

主に生息するのは、クラインが数ヶ月前に狩ったドスランポスをリーダーとして行動するランポス。

そして荷車を引くための動力として、また人間の食料としても重宝される草食種であるアプトノスなどだ。

しかし、何もない時はランポスが森と丘を我が物顔で闊歩しているが、とある時期を境にこれは変わる。

ーココット村ー

「卵があった？」

増殖しすぎたランポス討伐から帰ってきたクラインは、狩りの最中、飛竜の巣とされる場所で大きな卵を発見したことを村長に報告した。

《飛竜の卵》と呼ばれるもので、その名の通り飛竜の雛が孵る卵だ。

非常に栄養価が高く、美味として、王都の上流貴族のパーティなのでよく振る舞われる食材ということだ。

そこまで言われると気になりはするが、あれを持ち帰ろうなんて毛頭思わなかった。

尤も、勝手に持ち出しさえしたらギルドからどんな処罰を受けるかわからない。そんな食料として需要のある飛竜の卵は時にハンターの依頼の対象となることもある。その殆どが前述の通り王都からの依頼で、卵を取ってきて欲しいというものの。

しかし、その依頼はとても難易度が高いことで有名で、いくら実力のあるハンターでも卵運搬の依頼だけは避けてしまうということ聞いた。

まず、飛竜の卵は卵と言えどそのサイズはとても大きく、人が1人抱えるのがやっとな大きさだ。

また、見た目の割に重量もあり、大変割れやすいので、運搬中に飛竜に襲われたらやむなく地面に置くしか無いという。

しかしすぐに割れてしまうので、その時点でまた卵を取りに行かなければならない。飛竜の巣は緩衝材の役目をしており、卵を置いても割れない。

ベースキャンプに置いてある納品ボックスの底にもこれと似た材質の緩衝材が敷いてある。

これのおかげで納品した卵が割れないようになってる。

クラインもその話を聞いていると、運搬の仕事はしたくないなと思ったのが素直な感想だった。

「ふむう・・・」

「飛竜が丘に来たってことだよね？」

「いや、しかしギルドからまだ何も聞いておらんからのう」

飛竜の卵が巢にあったということは、産卵のために飛竜が来ているということだ。そうなれば近隣の村などに危害が及ぶ場合があるので、村の村長などにギルドから通達が入るようになっていた。

しかし、今回はまだ飛竜出現の通達は来ていなかった。

ましてやココット村はハンターズギルドの本拠地《ミナガルデ》からも近い。

万が一にも通達が遅れるという場合もあるかもしれないが、それは村長がまたハンターをやるほど可能性は低い。

「まあ、近々街から商隊が村にやってくる。その時に一緒に来るのではないかの」「商隊？」

「村にまた新しい物資が入ってくるぞ。その中にいくらかお前さんらハンターにも

役立つものも入っておる。まあ、一度流通が出来上がれば、今後からわざわざ狩場にいかなくても済むようになる。」

「それって村長の肉を取ってこなくていいってこと？」

「ほっほっほ。なんじゃ？生肉受注のクエストが不満かの？」

クラインはドスランポス討伐後、大型モンスターと戦っていない。

そもそも、ココット村のような場所に依頼が流れてくることは稀だ。

それにまだ実力も伴っていないため、大型モンスター討伐の依頼が回ってくる優先度は低い。

前回のドスランポス討伐依頼は、村長が街のギルドに問い合わせ回してくれたものだ。

「不満じゃないよ。ただもうちょっとハンターとして経験積んでみたいなんて思っ
て・・・」

「と言われてものお・・・」

そう言って村長は家の中に入っていった。

どうやらあの奥でギルドから送られてくる依頼を管理しているようだ。

ハンターズギルドの仕組みが一体どういったものなのか、クラインは知る良しもないが、毎日送られてくる依頼書は一体どう区分されているのか気になる。

ハンターへの依頼は基本的にハンターズギルドを介して行われる。

ハンターズギルドが一般の人からモンスター関連の様々な依頼を引き受ける。

モンスターの討伐や卵の運搬、採取の依頼などなど。

それらをハンターズギルドの本体があるミナガルデから各管轄区域の村へと分けられるらしい。

ここシュレイド地方にはココット村以外にも人が住む集落は存在している。しかし、まともに狩りをできるハンターはそうそういないだろうと、村長は言っていた。

ミナガルデ管轄のギルドに登録しているハンターのうち、約2割ほどしか本当に実力のあるハンターはいないらしい。

志半ばで狩場で命を落とすものもいるし、そうでなくても狩りによる怪我が元でハンターを引退するものも少なくない。

そう考えると、何十年もハンターを続けられるハンターは本当にすごい存在だと思ふ。

やがて、村長が家の中から戻ってきた。その手には何枚かの依頼書が握られていた。

「コcott村は森と丘から近いからのお。ここら一帯の依頼は入ってくるようになってるんだが、今の所モンスター討伐依頼はないのう」

「さっき俺が行ってたランポス討伐くらいか・・・」

「して、わしは少し心配なんじゃが・・・」

ふむう・・・と息を付いて、村長は杖をドカッと地面に付き、その上に顎を乗せる感じでクライインに言ってきた。

「ランポスの大量発生ということは、おそらくまたドスランポスが現れたということじゃ。飛竜の襲来よりもそっちの方がよっぽど現実味はあるわい」

「どういうこと？だって飛竜の卵があったってことは、飛竜ももういるんじゃない？」

「その可能性もあるがの。飛竜の卵と言えど、なんの卵かわからんからのお。種はわからぬが、稀に卵だけ産んで孵ってからも育てないという種もいるらしいから。だから飛竜の卵は親がいなくてもその場にあることもある」

「へえ・・・そんな種類の飛竜もいるんだ」

「尤も、リオス科の卵であれば危険じゃがのお」

リオス科とは《火竜・リオレウス》や《雌火竜・リオレイア》のことを指す。

この2体、番でよく一緒に行動している姿も目撃されている。

リオレイアは専ら子育てと食料確保をして、リオレウスが外敵の駆除など、夫婦で役割がしっかりと分担されている。

さらに卵を持ち去ると追いかけてくるらしいので、飛竜の中でもリオス系の卵運搬は危険度がとても高いのだ。

「まあ、卵運搬の依頼であればお主でも受けられるがな」

「いやあ、それは遠慮しておくよ・・・」

苦笑いを浮かべ、クラインはそう返した。自分が大きな飛竜の卵を抱えて逃げ回る姿を想像したら、どうにも滑稽でおおよそ自分が思い描くハンター像からは遠のいていた。

「さて、次の依頼じゃの」

そう言って村長は懐から一枚の依頼書を出してみせた。クラインは差し出されたそれを手にとって依頼書の内容を確認する。

「・・・護衛依頼・・・？」

ハンターの仕事は主に討伐依頼、採取依頼など基本的にハンター単独で行うものがほとんどだ。

しかしギルド側から特殊依頼としてこういった護衛などの仕事も回ってくることもある。

それは対人を予想された護衛よりも、モンスターの生息域を横断する一般人をモンスターから守るといったものだ。

そして依頼書に書かれた内容にはメタペタットからココット村にやって来る商隊の護衛依頼だった。

「メタペタットからの商隊の護衛？」

「そうじゃ。今度この村に商隊がやってくるんじゃが、その護衛をお前に任せたい。丘を横断するのじゃが、そこからお前も合流してもらい、商隊を安全に村まで迎え入れるのじゃ」

メタペタットとはアルコリス地方にあるココット村から森と丘を超えた先にある村で、ハンターが中心になって興した村だ。

狩場から《メタペ湿密林》という通称《ジャングル》と呼ばれる狩場に近く、ジャングルに行く際の中継地点になることもある。

そこからココット村に商隊がやってくるらしい。内容としては森と丘を通過する際の護衛をハンターにお願いしたいとのことだった。

もちろん、メタペタットからもハンターはついてくるが、《森と丘》到着時点でクラインとも合流するという手筈になっている。

「これからココット村とも有効的な関係を築いていきたいからな。村を代表するハンターとして、お主の力をみせてやってくれんかの」

そう言われると悪い気はしない。

ーミナガルデー

切り立った崖の中腹にその街はあった。

急な坂を駆け上り、おおよそ街とはわからないほどの見た目をしている。

わずかな平地には商店や武具工房、広場も申し訳程度に存在し、街と言えど多様な人々で賑わうような街ではなく、行き交う人々は皆、その身を鎧で固めており、背には自己を主張するかの如く、多様な武器を背負っている。

片手剣、大剣、ランス、ハンマー、ボウガン。

さらにその武器種の中にもモンスター素材により見た目や性能が大きく変わってくる。

より強敵のモンスター素材から作れる武具を装備していたら、それはそのままそのハンター自信の実力を表している。

人が住むには快適という環境ではなく、辺りは常にモンスター襲撃の可能性を抱えている。

しかし、ことハンターにとってはその環境は快適というほどであった。

シュレイドのハンターは皆この街に集い、ミナガルデギルドから直々に依頼を受ける。

そうしてハンターが稼いだお金が、ミナガルデに点在する各武具屋や商店、酒場などに流れて、この街の経済は形勢されている。

まさにハンターの街という他ないほどであった。

中腹に存在する噴水の目の前には、酒場兼ギルドから依頼を受けるためのカウンターがある。

中は酒の匂いとハンターの防具から発せられ野性的な匂いで、独特な空間になっていた。

その受付カウンターに、1人のハンターが机一杯に広げられた依頼書を眺めている。

「飛竜種の依頼はないか・・・」

全身をランポスから成る防具で固めて、背には大剣・バスターブレイドを背負っている。

彼の名は《マハト・アルペンハイム》

ココット村出身のクラインの1つ上で、クラインより先にハンターになった。

村で依頼をこなすも、生来の風来坊基質から、まもなく村を出てシュレイド各地を放浪して、各地の出張ギルドなどで依頼を受けて生活をしてきた。

本人は野良修行と称しているも、その依頼のほとんどは村のために必要な素材を取ってこいなど、単純な力を追い求めるマハトからしたら理想とは呼べないハンターライフを過ごしていた。

そこで、各地の依頼が集中するここミナガルデに足を運んだのだ。

「飛竜が狩りたいの？ だったらまずはハンターランクを上げないとね」

そういったのはギルドの依頼を紹介する受付嬢だった。

ハンターランクとは、ミナガルデに設けられているシステムの1つで、そのハンターランクに応じて各ハンターごと受けられる依頼が変わってくる。

これはハンターの現場で殉職率を大きく下げる役割をになっており、これによりハンターの士気もあがり、確実に実力のあるハンターが育っていくようになっていく。

尤も、上に上がれば当然、難易度が上がるのでモンスターに敗れるハンターも少なくないのだが、ハンターランク制度が設けられる前は、リオレウスを狩れるハンターを探す方が難しいと言われていた。

ただ、現在でもここミナガルデではリオレウス級の飛竜を狩れるハンターというのは限られている。

「あなたはまだハンターランクが1。イェンクックも受けられないよ。」

「な・・・！ 俺は以前、メタペタットでイェンクック討伐依頼を受けて倒したんだぞ！」

「それがこの街の決まり。まずは地道にハンターランク1の依頼をこなしていくべきね。」

「くそう・・」

マハトはイヤンクックを狩った経験はあるものの、それは野良修行中に立ち寄った村でのことで、この街ではそれは通用しないことだった。

そもそも、イヤンクックはハンターの登竜門とも呼ばれ、正直そのくらい狩れなければ、この街での依頼は受けられないということなのだろう。

もちろん、特例もある。

村などを拠点に活動していたハンターが大きな功績を上げた場合、特例でミナガルデギルドと呼ばれ、高ハンターランクで登録してもらえらるというもの。

ハンター社会と言っても、本当に実力のあるハンターは少ない。

緊急自体のときに、すぐさま動けるハンターが欲しいというのがミナガルデギルドの考えだった。

「ほっほっほっ」

聞き慣れた笑い声が聞こえ、マハトは受付嬢の隣でテーブルに腰掛ける老人の方

に目をやった。

この老人がこの街、ミナガルデのギルドマスターだった。

ギルドマスターとは各管轄ギルドをまとめる最高責任者のような存在。

その姿はココット村の村長と瓜二つで、マハトは最初ミナガルデに来た時、村長なのかと勘違いしたほど。

しかし、よくよく話を聞いてみると、どうやらこの老人は村長の兄弟らしい。

どちらが兄でどちらが弟なのかは判然としなかったが、老人の兄弟関係にそこま
で興味を示さなかったマハトは、それ以上言及せずにいた。

「じゃったら面白い依頼をやろうかのう。」

そういつてギルドマスターは一枚の依頼書を差し出す。

「護衛の仕事・・・？メタペタットからココット村まで・・・？」

「お主の故郷じゃる。帰るついでにこの依頼を受けてはくれんかのう。ちと人手不足でな。なかなか受けてくれるハンターがおらんのじゃ。」

そう続けるギルドマスターの顔を見て、依頼書の内容を確認する。

マハトは村長の出す依頼に嫌気がさして村を出た。

もっと大きな敵を狩りたい、ハンターとしてもモンスターと渡り合いたいという思いとは裏原に、村長が出す依頼は鉱石の採取、肉の調達、村の先輩ハンターのトランプの材料収集など、雑用とでも言うべきか、なかなかハンターとしての経験が詰めずにいて、我慢できずにマハトは村を飛び出してしまった。

それが半年前。

まったく村には帰っていなかった。

帰る時はずっと大きなモンスターを狩って村長を見返してやるんだと、マハトは決めていた。

しかし、結局街まで来ても同じだった。

最初のうちは簡単な採集や小型モンスターの討伐依頼など、簡単なものからこなしていく。

マハトがイヤクックを狩ったのもたまたまタイミングが良かっただけで、本来は他のハンターに流れる依頼だったが、村から近い場所でイヤクックが暴れている。

すぐに出れるハンターがみんな依頼に出てしまったという理由から、マハトが名

乗りを上げた。

実際の狩りでは苦戦を強いられて、状況は常に押されっぱなしであった。

とても善戦と言えるものではなかったが、イヤクックを倒したときの達成感は凄まじいものだった。

あんなに大きなモンスターを狩れたんだ。マハトの自信に繋がっていた。

村に帰って報告するのもいいだろう。そう思い、マハトはこの護衛依頼を受けることを決めた。

ー森と丘ー

クラインは森と丘に来ていた。ベースキャンプで準備を済ませながら、護衛の流れを再度確認していく。

今日の昼時にシルトン丘陵に差し掛かる商隊を迎え入れて、無事に村まで届けるのがクラインの仕事だった。

どうやらメタペタットからすでに護衛のハンターが付いているようなので、そのハンターと2人で丘を越えようというものだった。

「ベテランのハンターとかだったらやりづらいなあ」

メタペタットはハンターが多く住む村なので村専属のハンターというのもたくさんいるだろう。狩りの経験はきつとそのハンターの方が多いにきまっている。あまり変なところを見せてしまうと、コcottのハンターは弱いなんてことになりかねない。

それは村の評判、村長の評判にも響くだろうし、なによりクライン自体の評判も悪くなってしまう。

いつもの討伐依頼よりも違う緊張感を抱いたまま、ポーチの中に必要分のアイテムを詰め込み、クラインはベースキャンプを後にした。

ーエリア1ー

「おかしいな・・・」

シルトン丘陵のエリア1は草食竜のアプトノスが生息するだけのエリアで、牧場さながらのどかな雰囲気を持っていた。クラインはこのエリア1の空間が好きで、狩りの一間にここで休憩を取ることもしたあった。

なぜかここにはランポスなど小型モンスターも大型モンスターも入ってこない。だからこそ、アプトノスはここにいるのだろう。しかしこの様相は異常だった。

「なんでアプトノスが一体もないんだ・・・」

クラインの目の前にはいつもより一層静かになったエリア1が広がっていた。川の向こうにはアプトノスが群れを確認できるが、いつもは数頭こちらの岸に来て、草をついばんでいる。

「一体何だ・・・」

嫌な空気にクラインは先程の緊張とはまた別種の緊張を抱いた。森と丘の真ん中に佇む飛竜の巣を見上げて、何も起こらないでくれと、胸中につぶやいた。

1 エリア2 1

嫌な予感的中していた。エリア2。そこはランポスの群れが大漁に湧いてくる場所で、丘に入ってきた侵入者をそこで食い止めるが如く、ランポスが襲いかかってくる場所だ。

だが、クラインの眼の前に広がっていたのは焼き焦げた異臭とランポスの死体だった。鱗は黒く爛れており、超高温の炎で炙られたとわかるほど、損傷の深いランポスの変わり果てた姿が辺り一面に広がっていた。

数頭のランポスの真ん中に、ひととき大きな個体に大きな赤いトサカを持ったラ

ンポスの群れのボス、ドスランポスの死体も転がっている。

「そんな・・・あのドスランポスが・・・」

青い鱗は、炎で焼けただれたように溶けており、所々深い爪痕も見られる。クラインの片手剣の刃でも通りにくかった鱗にここまで深く入るほど鋭利な爪を持ち、高温の炎を操るモンスターがここにいる。

「火竜・・・」

数日前に見た飛竜の卵から容易にその原因を考察できた。ただ村長やギルドからも火竜出現の報告は受けていない。そもそも、ここまで辺りのモンスターを襲うほど凶暴化しているとしたら、近隣の村も危ないのではないか。

次にクラインは商隊の安否について考える。ここまで暴れているのではあれば、間違いなく今商隊をここにこさせるのは危険だ。あるいはもう手遅れになったか？ 最悪のパターンは考えずに、クラインは急いで商隊との合流地点に向かった。

その時――

「助けてっ!!」

奥の方から数人に影が見えた。どう見てもハンターの姿ではない。おそらく商隊

だろうとクラインは考えた。

クラインは走ってその人影の方に向う。

「商隊の方ですか・・・？」

防具も纏っていない、商隊風の服装に身を包んだ女性が1人いた。

「あ、あなたはもしかして・・・今日護衛に来てくださるといココット村の・・・？」

「はい・・・！そうです。それよりこれは・・・？」

「・・・か・・・火竜が・・・」

やはり・・・！

クラインは商隊の人たちに状況の確認を取った。

「予定よりも早く丘陵について、村から護衛に付けてくれたハンターの指示のもと、私達は丘を横断しようとしていました。向かっていけばココットからの護衛のハンターとも合流できるだろうと、ハンターさんは言っていたのですが、そこにあの火竜リオレウスが襲ってきたのです。事前に丘のモンスター環境についてはギルドに問い合わせていたのですが、まさか火竜がいるなんて・・・」

きつとギルドでも予想できないものだったのだろう。こういった非常の事態は

言ってしまったえばよくあることではある。

「それで・・他の人は？護衛のハンターは？」

「火竜が襲ってきて、私達は散り散りになってしまいました。ただ、商隊のほとんどは今、森の中に逃げ込んでいると思います。護衛のハンターさんも今はそちらに行っているかと。私達はそのまま丘を下ろうと、モンスターから隠れながらこまでやってきました。」

商隊の数はおよそ10人弱。その中で1人だけはぐれてしまったようだ。

「わかりました。とりあえずあなたは一旦ベースキャンプに避難しましょう。その後、僕が森のなかに行つて先に付いてた護衛のハンターと協力して、残りの商隊の方を連れてきます。」

「ああ・・よ・・よかつ・・」

途端、その人は腰を抜かしその場に崩れ落ちてしまった。

ハンターはともかく一般の人がモンスターと会いたいた時の恐怖は計り知れないものだろう。いや、ハンターである自分でさえも、恐怖を感じずにはいられないのだから、目の前で泣き崩れているこの人の恐怖は計り知れないものだろう。

よく見るとまだ相当若い。自分よりも上だろうがそこまで変わらないくらいの年齢だろう。

なんとかしなければ。

クラインはそう思い、商隊の女性をおぶってベースキャンプに向かった。

ーエリア 10ー

ーーーどうすればいい？

マハトは視界の悪い森の中、初めて相対する火竜リオレウスと向き合っていた。商隊は森の奥、小さな沢が流れる小型モンスターも入ってこない場所に避難してもらっている。

しかし、そこから抜けるにはどうしてもこの火竜をどうにかしなければいけない。マハトの幾度かの攻撃で退け、少しずつこの森の奥まで商隊を誘導したものの、やはり1人だけでは火竜に気を払いながら、商隊を誘導するのは指南の技だった。せめてココットからの護衛のハンターがくるまで持ちこたえることができれば……瞬間、火竜が大きく顔を持ち上げ口周りに炎が見える。

ーーー火球だ……!

超高熱の火球を飛ばす技で、大剣でガードしても相当の衝撃を受ける。

放つまでに時間がかかるのか、油断をしなければ食らうことは無い。

大きく横に吹っ飛びそれを回避する。マハトがいた場所を通り過ぎて、後ろの岸壁に当たる。ズシンと思い振動を感じて、パチパチと辺りの木々や草木を燃え上がらせる。

当たれば超高温で大火傷は避けられないだろう。辺りに転がっているランポスの死体を見て、同じ素材を用いて作られたマハトの防具一式が同じ末路を歩むであろうことは容易に想像できた。

あの火球は絶対に当たってはいけない。

しかし、そうは言っても近づくことすらままならない状態であった。近づけばその大きな尻尾によるなぎ払い、もしくは鋭い牙による噛みつきなど、接近戦にも対応している。

マハトはただ遠くからリオレウスの技を避けることしかできずにいた。

イェンクックとの戦闘経験だけでは到底敵わないという現実を叩きつけられ、マハトの戦意は徐々に削がれていっていた。

「目を瞑って!!」

森の奥からそう声が聞こえ、とっさにマハトは目を閉じた。瞬間、閉じた向こう側で何かが破裂する音が聞こえ、ついで強烈な閃光が瞼の向こうで爆ぜた。

リオレウスの鳴き声が聞こえ、目を開けた時リオレウスは強烈な閃光で視界を遮られ、辺り構わず暴れまわっている。

「こっちだ・・!」

閃光玉を投げしてくれたハンターに腕を引っ張られ、マハトは目の前で暴れまわるリオレウスに目をやり、荒れ果てた森のなかの水場を跡にした。

ーエリア11ー

商隊をかくまった場所。小さな沢が流れ、水の音が心地よく聞こえる。その奥にはアイルー達の住処がある。ここに商隊の姿見えないとすると、おそらく商隊はアイルーの住処まで行ったのだろう。

比較的アイルーは人間に対して有効的なため、襲われることはないので、ひとまず安心だ。

「ありがとう。助かったよ。」

マハトは先程助けてくれたハンターに礼を言った。装備はハンターシリーズ一式でおそらくまだ駆け出しのハンターなのだろう。しかし、あの場で閃光玉を投げて敵を攪乱させたのは良い判断だ。

「その声……もしかして……？」

そう言って、ハンターシリーズのハンターは頭の装備を取った。

「なっ……！お前……クラインか……？」

マハトは見覚えのある、しかしどこか垢抜けた表情のハンターを見て驚いた。マハトはクラインの1年先輩のハンターであり、同じコ Cott 村出身で幼少の頃は一緒に遊んでいたほどの仲だ。マハトもクラインもお互いにハンターになること目指していたこともあり、幼少の頃はよく2人で遊んでいた。

先にハンターになったマハトは、よりハンターとして名を上げたいという気持ちがあり、村を出てからはお互いの近況もわからないままだった。ましてや同じ依頼を受けているなんて思いもしないほど。

「クライン……お前ハンターになったのか！しかも護衛の依頼なんて……！」

「マハトこそ！メタペタットからの護衛がお前だなんて思わなかったぞ！」

旧友との再開。極度の緊張状態の中に訪れたつかの間の安堵の瞬間である。

しかし状況が変わらないのもまた事実である。旧友との再開もこの地獄とも言うべき場所から無事に立ち退かなければ意味がない。2人のハンターは互いの再開を喜ぶと同時に、この状況をどう打破するべきかと考えた。それは言葉にせずともお互いの目を見て共有できたことである。

マハトが口を開く。

「ここに商隊を避難させたんだが、おそらくさらに奥に行っただと思う。」

「この先は確かアイルーの住処だよな？ だったら大丈夫そうだ。でも・・・」

「外のリオレウスをなんとかしないと、商隊も俺たちもずっとこの森から出られないぜ・・・」

いずれはリオレウスは立ち去るだろう。しかし、辺りが暗くなってしまってから移動はより危険が増すことになる。リオレウスにも注意しなければならぬが、小型モンスターにもより注意を払わなければいけない。その前に個々を抜けた。早くギルドにリオレウス出現の胸を伝える。そして討伐、あるいは捕獲など、なにかしら対策を打っておかないと、近隣の村も危険にさらされる。

「クライン……。飛竜種の討伐経験は？」

マハトがクラインに聞く。

「いや・・実はまだなくて・・」

「俺もだ。イャンクックは一度狩ったことあるが、あれはその比にならない。」

マハトは森の奥を凝視し、その先にいるであろうリオレウスを意識して言った。

飛竜種は生態系の頂点に立つ存在で、リオレウスはその典型だ。この森と丘の生態系の頂点。それがリオレウス。空の王の異名を持つその名の通り、飛行による空からの強襲を得意とする。この森の中では、天井が木々に覆い尽くされ、その真価は発揮できていなかったが、それでもあの實力。まさに商隊を襲ってきた時は、空からとてつもないスピード滑空してきて、商隊の荷車を一瞬の内に粉碎してしまっ

た。

「護衛を頼まれたんだ。商隊を安全に村まで送り届ける。必ず」

マハトはそう言って、背負っていた大剣を研ぎ出す。

「やる気なの？」

「イャンクックと言えど飛竜種と戦ったことのあるオレの方がまだ戦えるはずだ。」

綺麗に研いだバスターブレイドの刃が微かに反射して沢の水面に映る。クラインの持つ片手剣ハンターカリンガと同じ素材を用いて作られたその大剣は、見た目からして相当な攻撃力を持っているように見える。しかしこれでも、飛竜に対しては雀の涙ほどのダメージしか食らわせられないという。

「俺はまだドスランポスくらいしか討伐したことないから・・・」

「飛竜種はドスランポスみたいに直線上の動きだけじゃなく、空を飛んで3次元的な攻撃もしてくる。オレ達ハンターはやつが降りてくるまで、ひたすら地上でまってるしかないんだよ。そこを狙って、飛んだら待って。そうやって地道に攻撃を加えていくしかない・・・」

「空・・・」

そういったクラインはふと、先程使ったアイテムのことを思い出した。

「マハト、これって使える・・・?」

そう言ってクラインはポーチの中から、こぶし大おほどの玉を取り出した。

「それっ・・・さっき閃光玉か! さっきも使ってたな・・・」

「これがあれば・・・」

2人はお互いに見つめ、静かにうなずいた。

―エリア10―

荷車が無くなったおかげで、商隊全体で動く事自体はかなり楽になっていた。コット村に運び入れるはずだった物資などはすべて無くなってしまったが、命と比べたら取るに足らない。その場にいた全員がそう思っていただろう。リオレウスは依然として、エリア10の水場付近に居座っていた。おそらく外的を完全に排除するために、そこにとどまっているのだろう。他のエリアで見たランポスの無残な姿を思い浮かべ、リオレウスは卵を守るために、ここまで殺気立っているのだろうとクラインは考察した。

おそらく自分たち人間も、卵を狙う敵だと認識されている。そのうえで、完全に排除するために、移動せずにここに留まっているのだろう。

森に続く道で戦闘を切るのはマハト。その後ろにクラインが備える。商隊の人達は案の定、身を案じて、更に森の奥に逃げ込み、アイルーの住処にいた。このアイルーの住処には時折、竜人族の老人である通称山菜爺さんという人物がいる。なぜか彼は時節狩場に現れ、やってきたハンターに有益なアイテムを与えてくれること

がある。

彼はアイルーと共存しているためか、突如住処にやってきた商隊の人間の状況を冷静に聞き、匿ってもらっていた。

そして今、商隊の人達はこの狩場から逃げるために、クラインの後ろに続く形で並んでいる。トラウマとなってしまうた火竜ともう一度対面してしまうかもしれない、恐怖でその場を動けない者もいたが、幸いここ々から一刻も早く立ち去りたい人が多数だったため、なんとか全員を連れてくることができた。

「クライン・頼んだぞ・・」

「ああ・・」

そう声をかけて、マハトは勢いよく足を蹴り出し、水場にいるリオレウスめがけて一直線に向かっていく。森を抜けるには、丘の方から迂回してくルートか、このまま森を抜けるルートかの2通りがある。丘から迂回するルートだとリオレウスに追われる可能性も大きく万が一小型モンスターもいた場合、危険度も増すため、クライン達は森を抜けるルートを選択した。しかし、その場合、どうしてもリオレウスの横を通り抜けて行かなければならない。

そのため、マハトは自ら囿になることを願い出て、リオレウスを誘導する役目を買って出たのだ。

「うおおおおお！」

雄叫びを上げてリオレウスに一直線に突っ込むマハト。走りながら背の大剣の柄に手を欠け、走るながらその勢いで抜刀する。振り向きざまのリオレウスの脳天にマハトの大剣が振り下ろされる。

ドッ！という鈍い音が森の中に反響し、静かに音が吸い込まれていく。リオレウスは瞬間、咆哮を上げて威嚇を始める。飛竜の咆哮はその音圧ゆえに直接聞いてしまうと、数秒だが隙ができてしまう。しかしマハトはこれを大剣を盾にして音圧を塞ぐ、怯みは無くならないが数秒隙ができるよりマシだ。

リオレウスが吠え終わると同時に、マハトは大納刀しながら距離を取った。先程の一撃でリオレウスは頭に血が登ったのか、口の端から炎がこぼれ落ちている。今にも炎を吐き出さんかというほどだが、怒りのあまり、漏れ出してしまっているのだろう。

マハトは視界の端にリオレウスを認めながら丘の方の坂まで走っていく。マハト

の役目はヒット&アウェイによる攻撃を加えながらリオレウスを誘導すること。空を飛ばれたらやっかいなため、なるだけ狭い場所で戦うようにする。

リオレウスはマハトの後を追うように突進を初めた。あの勢いで突っ込まれたらひとたまりも無いだろう。足元にいてもその鋭い爪で皮膚を引き裂かれるかもしれない。その恐怖を感じつつマハトは横に吹っ飛び、リオレウスの突進をかわした。そのままマハトは再度逆方向に走り出し、次は先程リオレウスがいた水辺へ向かって走っていく。

リオレウスの位置は森の北東、丘へと続く道の手前にいる。この状況を作ろうとしていたのだ。マハトの誘導により、逃げ道となるエリア8へと繋がる道。クライン含め商隊達が待機している場所から直進すれば最短距離でこのエリア10から離脱ができる。

商隊を安全にかつ、早くこの場から離脱させるためのルートを作り出そうとしていたのだ。

「クライン!!」

マハトがクライン達のいる方に声を掛けると同時に、クラインが姿を現してリオ

レウスの様子を確認する。

突進に失敗しその反動で地面に伏しているところだった。おそらくこの次はこちらに顔を向けて、再度突進をしてくるだろう。その瞬間を待っていた。

クラインがエリア10に侵入して、リオレウスの対角線を目指す。その間にリオレウスは方向転換をしてクライン達のいる方へと振り返ろうとしていた。

——ここだ！

クラインは手に持っていた閃光玉を投げて、次の瞬間には破裂音とともに森一面が閃光に包まれる。

閃光玉はモンスターの視界を短時間ではあるが奪うことができるアイテムだ。

クラインとマハトは閃光玉が破裂する瞬間に目を手で覆い、視界が奪われないようにしていた。そして閃光が収まり、リオレウスを確認すると、狙い通り、リオレウスは強烈な閃光により視界を奪われて転倒していた。

「今です！みなさん！」

クラインは後ろで待機していた商隊の人達に声を掛け、一斉にこの場から駆け抜けけるように促す。

商隊の人々は一目散に走り出し、クラインが指示したとおりエリア8へと続く道へと駆け抜ける。さつきまでリオレウスがいた水辺の横を通りすぎ、囿になってくれたマハトに声を掛けながら通り過ぎる。

その間も2人のハンターはモンスターから目を逸らさずに、敵の所作を見守る。気を抜いて、もしもリオレウスの視界が回復したら一大事である。

見たところ、リオレウスはまだ視界が回復していないようで、辺りに嘯みつきをしているが、その攻撃は全て空を切り、ただ暴れているだけである。

「今のうちだ！早く！」

後ろを走り抜ける商隊の人達にマハトが声を掛けた刹那、リオレウスの口元から炎がほとばしる。

「まずい！火球だ！」

そうクラインが叫んだ瞬間、リオレウスは火球を勢いよく放った。声だけで位置を判断したのだろう。火球は商隊達が走り抜ける方向へと放たれる。

それを見たマハトが瞬時に商隊の前に躍り出て、大剣を盾にして火球を受け止めた。

「きゃああああ！」

火球の熱気により、辺りが歪む。鉄の焦げた臭いと、一瞬だが足の止まる商隊達の間で時間が止まったような気がした。

「はやく！」

遠目から見ていたクラインは大声で商隊達を急がし、それでわれに帰った残りの商隊の人たちが走り出す。

マハトは火球を受け止めた反動か、腕を押さえつけている。その間にリオレウスの視界は回復したようで、身震いをし遠くで咆哮を上げていた。残りの商隊の人がエリアを抜けて、エリア10に残されたクライントマハト。

『まずい。この状況で商隊を追ったら、こいつまで付いてきてしまう』

商隊に付いていかなければ行けないとマハトは思うも、今のタイミングで商隊の後を追ってはリオレウスも付いてきてしまう。

その時、クラインは片手剣の柄に手を掛けながらリオレウスの元へと走り寄っていた。

商隊の側に最低でも1人ハンターが付いていないとならない。ベースキャンプ

まで安全が保証されていないからこそ、本来の護衛の任を全うするため、どちらかが付いていないといけない。

それはすなわち、誰か1人がこの場に残ってリオレウスを足止めしていないといけないということ。

クラインとマハトなら、飛竜種と戦闘の経験があるマハトが残るべきだろう。だが、位置的に最も商隊に近いのはマハトだった。

クラインはその状況をすぐさま理解して、ここで足止めする役目は自分だと理解し、リオレウスに向かっていったのだ。

ハンターにはこういった瞬間の状況判断がとても重要だ。だがどこを立ち回ることか。ことパーティーでの狩りの際はその頭の回転、状況把握能力、思考能力が大事になる。クラインは天然でそれを理解して、リオレウスの相手を引き受けたのだ。案の定、リオレウスは最も近い敵であるクラインの方を向いて、迎撃の体制を取っている。

ほんの数年前まで、村で一緒に遊んでいたクラインとは違う。マハトは勇敢に立ち向かう幼馴染の姿を見て、クラインの決心を無駄にしないために、なるだけ目立

たず、しかし迅速に商隊の後を追った。

マハトがエリア10を後にする間際、後ろから金属がぶつかり合う鈍い音を聞いたが、振り返らずに商隊の元へと走った。

ーベースキャンプー

エリア8からエリア1までの道中、全くと行っていいほどモンスターと遭遇しなかった。この2つのエリアは元々大型モンスターが来ない場所であったため、リオレウスがここまで来るといふ心配は無かったにしろ、普段はブルファンゴやランポスなども見かける場所だった。そのため、一刻も早く商隊を追う必要があった。しかし、リオレウスの影響だろうか、害を成すモンスターが一匹もいなかったのは、不幸中の幸いだろう。

「ここなら安全だ。みんなとりあえずここで待っていてくれ。ここだったらモンスターは絶対に入っていない。」

マハトはざっと商隊の安否を確認してすぐにベースキャンプを後にしようとした。

「あ……」

そう言って話掛けてきたのは、クラインが最初に助けた娘だった。商隊から唯一はぐれてしまい、商隊内ではもうダメだろうとすら言われていたが、まさかクラインが救出していたとは。ベースキャンプに戻ってきた時、彼女がいて、これで商隊全員の安否は確認できたのだ。1人も掛けずにあの火竜から逃げられた。

「もうひとりのハンターさんは・・・？」

「あいつなら今・・・あの火竜と1人で戦っている」

「1人で・・・!？」

命の恩人だからだろう。クラインの身を案じているようだ。それを認めたマハトは拳握り、自分にも言い聞かせるように彼女に声をかけた。

「あいつなら大丈夫だ！あれでも一人前のハンターだからな！」

一人前と称したのは方便だろうか。経験だけで言えば、半人前以下であり、マハトよりも圧倒的に狩猟の経験も無い。クラインの話を聞くに、飛竜との戦闘経験は今日が初めてだろう。それでもクラインは一人前だと言えた。

それは先にみせたクラインの行動の数々。あいつには、新人ハンター特有の迷いや恐怖のようなものが見られなかった。

あの状況でリオレウスに突っ込んでいく勇氣は、常人では持てないものだろうと思う。マハトは潜在的なクラインの才能を垣間見て、嫉妬を抱きつつもクラインのハンターとしての技量を認めていた。

その時、ベースキャンプの入り口が影に覆われた。反射的に振り返って確認すると、そこにはクラインの姿があった。

「クライン・・！」

クラインは息を切らしながら、マハトに向かって親指を立ててみせた。横で先程心配していた娘がハッと息を飲むのを感じた。同時に「良かった・・」と口にした。

「なんとか逃げ切ったよ・・」

クラインがそう言うと、線が切れたようその場に座り込んだ。慌てて駆け寄るマハトと娘。近づくとわかるが微かに焼け焦げた匂いがする。おそらくあの火球を受けたのだろう。よく見るとクラインの盾は黒く焦げている。どうやら盾で火球を受け止めたようだ。

「お前・・すげえな・・！」

マハトは素直にクラインを褒めていた。初の飛竜との戦闘がリオレウスというの

はそうそう無いだろう。こういったイレギュラー的に現れたモンスターに対してほとんどのハンターは撤退を強いるだろう。しかし今回は状況が状況だ。逃げようも自分たちだけでは逃げ切れない。ベースキャンプにいる商隊の人々がクラインに称賛を送る中、クラインはマハトにもたれかかったまま、大きく息を吐いた。

第3話 赤き怪鳥を狩れ!

リオレウスとの戦いから2ヶ月が過ぎたころのお話

〔登場人物紹介〕

・主人公

名前…クライン・クルーガー 15歳

武器…ハンターカリング

防具…ハンターシリーズ

ココット村に行商人が多く訪れるようになり、村が少しずつ賑わうようになっていた。

ココット村周辺は温暖な気候のため農作などをするにはうってつけの土地だった。

村の西では畑を作って農場を作ろうとする計画まで上がっており、これによりコ

コット村の流通がより改善されることを期待していた。

村の物流が上がったきつかけは2ヶ月ほど前にメタペタットからの商隊を迎え入れる体制を整えたことにある。

それに一役買ったのがココット村のハンター《クライン・クルーガー》と《マト・アルペンハイム》だった。

2人のハンターはメタペタットの商隊を護衛している途中、《火竜リオレウス》と遭遇するが、なんとかその場を切り抜ける。

誰一人死人を出さずに、全員無事で救出できたことにより、恩を返そうとメタペタットの村がみんなこぞってココット村に積極的に流通を促すようになっていた。当人たちは、その恩もまんざらでも無いという風に、今も狩りに出かけている。たった一度の活躍も、駆け出しの彼らにとっては何れも名声を飾る一つの出来事と捉えて、メタペタットの恩を確かに受けながらも、さらなる村の発展、自己の成長のためにも今日も仕事をこなしていた。

そしてクラインは今、1人ジャングルに来ていたの。

ージャングルー

メタペタットの村の近くに《メタペ湿密林》と呼ばれる地域がある。

ギルドでは通称《ジャングル》と呼ばれ、ハンター達の狩場として認定されている。

ベースキャンプがある場所はジャングルから離れた外れに位置し、景色が一望できるところだ。

それと相対しジャングルの中は木々が生い茂り、ハンターの視界を遮るほどだ。

それはモンスタースタも同じことだろうが、彼らは長年ジャングルで暮らしているためか、その視界の悪さを逆手にとって狩りを行う。

ハンターの間でも非常に評判の悪い狩場で有名だった。

ベースキャンプは古代文明の遺跡跡なのか、石のトンネルや通路も整備されていたような跡がある。

この世界でははるか古代の時代に竜対戦時代があったと言われている。

かつての人類は今とは比べ物にならないほどの技術力を有しており、それは自然をも脅かすほどだと言われていた。

村長から聞いていた話ではあるが、実際にこうやって生で時代の産物を目の当た

りにすると、この世界のその知れない深さを知り、モンスターと相対したときはまた別の、恐怖心のようなはたまた好奇心のような気持ちが生きてくる。

「すげー景色・・・」

ジャングルとは逆方向には、開けた景色が広がり、大きな滝がいくつも流れた景色が広がっている。

遠くでなっているであろう轟音の滝壺の音は、ここに届くまでには心地いいほどの音量になって届く。

初めて森と丘以外の狩猟地に出たクラインは、その景色を見て感動を覚えた。

同時にジャングルの中から「クエエエ・・・」と鳥類の鳴き声が聞こえてきた。

「目的を忘れちゃいけない・・・」

今回の狩りの目標は《イヤクック》の討伐だ。

怪鳥の異名を持ち、飛竜と勘違いされがちだが、ランポスなどと同じく鳥竜種に分類されるモンスターだ。

しかしその特徴は大きく異なり、骨格はリオレウスなど飛竜のそれと変わらない。ハンターの間では狩りの登竜門と呼ばれる存在で、駆け出しのハンターの当面の

目標はこのモンスターを狩ることにある。

クラインも例に習い、イャンクックの討伐を受注してここジャングルにやってきたのだった。

クラインより少し先にハンターになったマハトもすでにイャンクックを討伐しており、彼に追いつくためにもクラインはイャンクック討伐を受けたのだ。

そのマハトはというと、元々、各地を転々とする流れのハンターではあったが、今は故郷のココット村に在籍し、依頼をこなしていた。

最初こそ、2人で狩りに出かけていたが、マハト曰く『イャンクックくらい1人で狩れなきゃ、俺の相棒とは呼べないな』とのことだった。

何かとクラインと張り合うマハトと、一切競争心を見せないクラインだったが、この言葉は確かになと腑に落ち、メタペタットから直々に依頼を受けたのだ。

「そろそろ向かうかなあ」

駆け出しのハンターと言えど、リオレウスとの死線をくぐり抜けたクラインだ。それからというもの、装備を整えてこの日のために準備をしてきたのだ。

クラインはアイテムポーチを確認し、必要な道具があることを認め、ベースキャ

ンプから一番近い方の入り口からジャングルの中へと入っていた。

ー ジャングル エリア 1ー

赤い怪鳥と呼ばれているのは聞いていた。

しかし実際に目の当たりにしてみると、それは赤というよりも桃色に近い体色をしている。

リオレウスと比べると見た目の凶暴さはそこまで感じず、動きはコミカルで、どこか可愛らしさを感じる。

しかし、その表情からは感情が読み取りづらく、人間でいうところ無表情な感じが不気味にさえ思えた。

怪鳥イェンクックは、クラインがエリア1に侵入したタイミングでちょうどやってきて着地した。

先程まで遠くから聞こえてきた彼の鳴き声が近付いているのは気がついていたが、こうもすぐに遭遇するとは思わなかった。

クラインは一旦、木々に息を潜めてイェンクックの動きを見る。

着陸するやいなや、口から火炎を撒き散らし、威嚇行動を行っている。

着陸して間もないタイミングを外的に襲われないようにするための一種の防衛手段なのかもしれない。

イャンクックの攻撃手段は、特徴的な嘴によるついでみと、その嘴から放たれる火炎液と呼ばれる発火性の液体を吐きかけ攻撃を行う。

注意すべきはその火炎液で、触れればやけどは免れないと、マハトから聞いていた。

噂通りのイャンクックは辺りに火炎液を撒き散らし、辺りの草木を焦がしている。周りにはランポスなどの小型モンスターが数頭見られ、イャンクックは彼らに対して威嚇行動をしているようだ。

ワイバーンの中では比較的小さい部類に入るものの、縄張り意識は強いようで、小型のモンスターに対しては敵意を出すようだった。

それは人間であるクラインも変わりはないだろう。眼の前に飛び出せば一触即発。

すぐさまその敵意はクラインにもくけられるはずだ。

クラインの狩りはモンスターの同行を観察し、攻撃パターンや癖を付いて攻撃を

加えて行く手法だ。

村で一緒に狩りをしているマハトはそれとは逆で、果敢に攻め込み怯みなどで体を崩したところに、大剣の重い一撃を食らわせていく方法だ。

ハンターの性格により狩り方は千差万別。

「クエエエ」

イヤンクックの独特の鳴き声がジャングルの中にこだまする。

イヤンクックがクラインに背を向けるタイミングでクラインは走り出す。

まずは一撃を加えてこちらに存在を気づかせる。臨戦状態時の攻撃パターンは戦い始めなければわからないのだ。

尻尾めがけて走りより抜刀しながらジャンプ斬りを敵の背後に加える。

ゾリッ

ドスランプスを切ったときとは違う感触が刀身から、柄を握るクラインの手に伝わる。

一度の切りつけで、ドスランプスの鱗とはまた違った質を伝え、鱗がより密集して別のものになっている。

その堅さはまさに甲殻と呼ぶべきもので、十分な切れ味がなければ弾かれるだろう。

尻尾の付け根を切りつけて、その斬った部分から若干の血が飛ぶ。

しかし対して有効なダメージを与えているとは思えなかった。

イヤクックからしたら木でも刺さった程度のダメージだろう。

だが、その一撃はイヤクックに自分の存在を知らせるのは十分だった。

イヤクックはクラインの方向に身体を向け、身体をのけぞらせる。

クラインはこのスキをつけてさらに攻撃を食らわせようとする。

「グギャアアアア！」

突如、鼓膜を突き刺す咆哮がクラインの耳を襲い、慌てて耳を塞いだが、そのモニスターの咆哮はクラインの本能的な恐怖を掻き立てるのに十分だった。

リオレウスの咆哮を聞いた時と同じ感覚。

身体が硬直し、その場から動けなくなっていた。

イヤクックが次の動作に移るのを、クラインは両耳を塞いだまま目だけはイヤクックの大きく開けた嘴の中を覗いていた。

ーココット村ー

「クラインは無事に帰ってこれるかの？」

「村長、なに縁起の悪いこと言ってるんだ」

村では村長とマハトが話している。

クラインを送り出して数日経った。

今頃クラインはイヤクツクの狩りの途中だろうか。

マハトはクラインとイヤクツクが戦っている姿を想像し、自分が初めてイヤクツクと対峙した時のことを思い出していた。

マハトは初の大型飛竜討伐成功まで、かなりの失敗を繰り返していた。

今でこそ、勇猛果敢なマハトではあるものの、ハンターに成り立てのころは右も左もわからず、ドスランポスを狩れたことを誇らしげに思い、自分の力を過信していた。

しかしそれは結局過信であったと、今思い返しても思う。

クラインには言っていないが、3度の敗北を喫して、4度目にしてようやくイヤクツク討伐できたというのがマハトの経歴だった。

マハト自身、恥ずかしく同業者には誰一人として言っていない。唯一この事実を知っているのは、目の前にいるこの村長か。

「お主は何度目で狩猟できたんだったかのう？」

「や・・やめてくれ・・！」

遠くない過去ではあるが、早く無くしたい過去であった。

「マハトお主・・クラインも失敗しろなんて思っておらんじやろうな？」

「まさか・・！そんなわけないだろ」

冷や汗が出たような気がするが、マハトは事実そんなことを思っただけではなかった。

ある程度ハンターとして経験を積んで、今ですらイヤクックの討伐は油断しなければ難なくこなせる。

その他の飛竜ともそれなりに経験もあったのだ。

そして何より、マハトはクラインにイヤクック討伐の際のポイントなどを教えていた。

有効な道具、罟、行動パターンなど。

わかる限りのことはクラインに伝えていた。

「そうじゃの。あんなに熱心に教えてやっていたもんなあ」

「俺も成長したってことさ」

そう言い、マハトはふとクラインの家の方向に目をやる。

幼馴染としてこの村で一緒に育ったクラインとマハト。

2人とも親無しという境遇を持ち、お互いがハンターを志していた。

似たような2人ではあるが、性格は真反対。

マハトは熱血漢でクラインは冷静。物語の主人公なら断然自分だろうと、マハトは思っていた。

だが、マハトはクラインの底知れぬナニカを感じ取っていた。

普段、冷静でいようとも、あんな巨大なモンスターを前にしたら誰でもビビるものだろう。

現に、マハトも初めてイヤクックと対峙したときは心底ビビったものだ。

ましてやりオレウスと遭遇した時なんて、無事に逃げ切れるかどうか？という思いが先行し、まともに立ち向かおうなんて思いもしなかった。

しかしクラインは違った。苦戦するマハトの前に躍り出て、閃光玉によりリオレ

ウスの動きを封じ、そしてリオレウスに立ち向かった。

その時、一瞬ではあるが視界に入ったクラインの姿は歴戦のハンターのそれだった。

クラインから恐怖心というものを感じなかったのだ。いや、正確には恐怖はあったのだろう。身体は確かにこわばってはいた。しかしそれ以上に、クラインを突き動かしていたものは違った。

「クラインはハンターを好奇心でやっておる」

ふいについた村長の言葉に、マハトは？と眉間にシワを寄せる。

「やつは力や名声欲しさにハンターをやっているわけではないんだよ」

「どういうこと？」

「世界を知りたいんじゃないと思う」

「世界・・・？」

聞き慣れた、しかし耳に馴染まない言葉にマハトは困惑する。

そう言えばクラインのハンターの動機を聞いたとき「父さんや母さんがやってい
たから」としか聞いたことがない。

マハトがハンターを目指したのは、商人をやっていた両親がモンスターに殺されたからだ。

そこからモンスターを倒せる力が必要だと思ったから。単純だった。

クラインもそんな理由だと思っていた。

「この世界はとにかく広い。そしてわし達が知らないこともたくさんある。本来クラインはハンターとしては不向きなんじゃよ」

「それじゃあ村長はなんであいつにハンターをやらせたんだ」

「わしはハンターのことしか教えられん。それにこの村はハンターのために建てた村じゃ。自分の村の子がハンターになりたいと言っていたら、ハンターをやらしてあげるのが道理じゃ」

「この村長は・・・」

ハンターに向かない。村長の言った言葉を反芻させ、マハトはここ最近一緒に狩りに行った時のクラインの様子を思い浮かべていた。

ージャングルエリア3ー

草木が焼け焦げた臭いが鼻孔をつく。

焼けた臭いの中に生物独特の形容し難い臭いも混ざり、気分が悪くなりそうだった。

マハトが教えてくれた情報によるとあの火炎液は体内の火炎袋という器官で作られ、吐き出されるらしい。

しかしその火炎袋の中身は液体ではなく粉塵が詰まっており、おそらくそれ以内で唾液と混合させることで、あの火炎液を作っているのだろう。

この生物臭はイヤクッククの唾液なのだろうか。

クラインは攻めきれずに一定の距離を取り確実に攻撃を加えられるタイミングで一撃を加え、距離を取る。

そうやって地道に敵の体力を削っていた。これがクラインの狩りの仕方だった。クラインには狩りの師匠というものはいない。強いて言うなら村長になるのだから、彼から聞いてたのはハンターの心得のようなもので、実践的なことではない。最近村に帰ってきたマハトと一緒に狩りに出るようになり、自分との狩りの違いを知ったくらいだった。

「オレとマハトの違い・・・」

ダメージは与えている。だが、これほど巨大なモンスターに一体どれほどこれと同じように攻撃を食らわせればいいのだろう。

ヒット&アウェイの境地。確実に安全なスキでないと攻撃はしないこの方法だと、その名の通り防戦一方だった。

イャンクックは次の攻撃に備え、姿勢を構えている。この姿勢は突進だ。嘴を大きく開け、その巨体を思いつきりこちらに突進させてくる。

一見間抜けな姿ではあるが、あの巨体に巻き込まれたらひとたまりも無いだろう。その威力はイャンクックが突進後、倒れ込んだ地面の様子を見て一目瞭然だった。土はえぐれ、立ち上がる際に力んだであろう足の跡が残っている。

これだけ距離があいていれば避けるのは簡単だ。だがその後、攻撃を入れるかどうかで迷う。

スキを狙って攻撃を与えるのは真つ当な狩猟法ではあるが、クラインの場合はより深く考えすぎて攻撃ができずにいた。慎重になりすぎるがゆえに守りに徹する。自分は傷つかないが、相手にもダメージを追わせることができない。そんな状態が続いていた。

「行くしかない・・・」

クラインは頭の中でマハトの姿を思い浮かべて、彼の動きと重ねるようにモンスターに斬りかかる。

モンスターにできる僅かなスキ。それはほんの数秒ではあるが、その数秒は確実に相手を追い詰めている。

瞬間、クラインは走り出しイャンクツクの右横に入りこむ。尻尾の位置に陣取ると、ほぼ確実に尻尾回しがやってきて当たる可能性がある。

イャンクツクの死角に入り込んだクラインを追い払おうと、イャンクツクはその大きな巨体を構えて尻尾を振る体制を構えている。

それを確認したクラインは横に転がり、尻尾の攻撃範囲から脱出した。次の瞬間には元々クラインがいた場所に尻尾が飛んできて、空を切る尻尾の音が響く。

そのスキを狙ってクラインは抜刀しながらイャンクツクに飛びかかった。

イャンクツクの右足後方を切りつけ、抜刀しながら振り下ろした剣を振り上げて2撃目を加える。

その瞬間、イャンクツクが大きく体勢を崩して地面に転倒した。

この瞬間を狙ってクラインはさらに追撃を加えるべく、頭の方に向けて2撃3撃と攻撃を加える。

今まで一番の有効的な攻撃だろう。

色々な種族がいるが共通して弱点は頭部だった。

体を切りつけていたときよりも、剣先から伝わる感触は非常に柔らかく、飛び出す血飛沫もより多く見える。

イヤンクツクの頭部の大半を占める大きな嘴を切りつけて、傷が入っていく。

ある程度切りつけたところで、イヤンクツクは体制を立て直して、クラインの攻撃もお構いなしに立ち上がった。

クラインは距離を取り、イヤンクツクの次の動きを観察しようとした。

嘴からは体内で燃えたであろう炎が漏れている。

ゆっくりと脚を立てて、頭をフルフルと降ってゆっくりと動くイヤンクツク。クラインを確かに視界に入れて次に大きな咆哮を上げた。

「グギアアアア！」

ジャングル一帯に響き渡る大きな方向に、回避をすることを忘れていたクライン

は思わず耳を塞いで硬直する。

そして次の瞬間には脚を蹴り出してイヤンクックがクラインに突進をしてきた。ギリギリ硬直を脱したクラインは横っ飛びに回避して、ズザーッと地面を滑る。違和感をすぐに覚えたクラインは、次にイヤンクックを視界に収めたときに、ドカッという鈍い音を聞いていた。

衝撃が体のあちこちから感じて、気がついたときにはジャングルの地面を見ていた。

クラインが覚えた違和感。

突進から次の突進までの間隔があまりに短い。

通常ですら突進後はその2本の脚では巨体を抑えきれずに地面を滑りながら停止するのだが、そのスピードすら上がっている。

《怒り状態》

モンスターは生命の危機に陥ると、怒り状態になり攻撃力や俊敏性があがるとマハトが教えてくれた。

モンスターと言えどもある程度の理性は備えているものの、人間のそれにはおよ

そ届かない。

しかし、一度このタガを外してしまふと、モンスター凶暴性は一気に上る。

通常状態と同じ感覚で戦っていると、やられるぞ。とマハトが注意していたが、言ったとおりになっていた。

クラインが頭で次の行動を読もうと考えている間に、イヤンクックは次の攻撃を仕掛けてくる。

結局防戦一方になってしまったクラインは、敵の攻撃をやり過ごすので手一杯になっっていた。

盾でガードするも仰け反り、大きく回避をしようとしても立ち上がる前に次の攻撃がやってくる。

攻撃を紙一重でかわしながら、消耗するしかないクラインは、無限とも思われる時間を感じていた。

ーココット村ー

「あいつは頭の回転が早かった」

そういったマハトは、ここ何ヶ月か一緒に狩りに行ったクラインを思い返してい

た。

「リオレウスと対峙したときもそうだった。少しだけみたりオレウスの動きを分析して次の攻撃を予想して閃光玉を当てて相手を攪乱させていたんだ」

手数で相手をひるませるマハトのやり方とは真逆で、攻撃のスキを付いてこちらが攻撃していくヒット&アウェイ方式のクライン。

マハトはクラインから学ぶ部分も多々あったことを振り返る。

「ハンターにもいろいろいるのが、奴の場合はまた特殊じゃ」

普通は血の気の多い者がほとんどじゃからの。村長はそうつぶやいた。

そうだ。ハンターという職業は基本的に血の気の多い者になることが多い。マハトもその一人だ。

男としての習性だろうか。巨大なモンスターを狩る自分を夢見てハンターを志すことが多い。

そんな中、クラインのようなハンターは稀と言える。

クラインがハンターになるきっかけに、少なからず両親のこともあるだろうが、復讐心に駆られてハンターになったようには見えない。

クラインはモンスターの習性を調べるのに余念が無かった。

リオレウスがなぜ火を吐くのか。ランポスの集団がなぜボスを筆頭に纏まりができるのか。

それらに対して疑問を抱くのがクラインだった。

と言ってもこれら知識が全く意味の無いものということもなく、それら知識が狩りに役立つという場面も多々あった。

「王立古生物書士隊が出しているモンスター図鑑も熱心に読んでみたいだしな」
王立古生物書士隊とはモンスターを研究している組織のことで、現在判明しているモンスターの情報は彼らの研究の末わかっていることがほとんどだ。

それらモンスターの情報をわかり易くまとめたものが、ハンター向けに販売されているモンスター図鑑というもの。

これらには現在確認されているモンスターの生態などが事細かに描かれ、それからモンスター討伐のヒントにもできる。

一般的にハンター達がモンスターごとに行っている戦略はこれらモンスター図鑑を元に行っている部分がほとんどだ。

「それは読んだほうがいいじゃろう。わしの時代にはそんなものも無かったからの・・」

それもそうだ。とマハトは腑に落ちたが、あんなものを読もうとも思わない。

そもそも、基本的なモンスターの対処法は凶鑑を読まなくても、立ち回りの基本としてハンター間で勝手に伝わっている。

いかなればクラインは単純にモンスターに対する興味でハンターをやっているように思えた。

「それが悪いってわけではないがの。ハンターというものは人それぞれ千差万別じゃ」

村長はココット村の南東に立つ大きな木を見て呟いた。

もう少し暖かくなったら綺麗な桜が咲き、ココット村をより一層彩る景色の一部となる。

「いろんなハンターがいたほうが面白い。わしはそう考えてこの村を作ったんじゃ」

一際大きな木の根元には、かつて村長が使っていたと言われている《ヒーローブレイド》という片手剣が台座に突き刺さっている。

さながら英雄の剣という佇まいで置かれているその剣。しかし、長年手入れしていないせいも、少しばかり当時の輝きは失っているようだった。

いつか自分以上に使いこなしてくれるハンターが現れるだろうと願って、村長はその木の根元に台座を用意して突き刺したのだ。

次世代の英雄を育てるために。

1 ジャングル エリア 2-1

ジャングルのエリア 2 はより一層木々が生い茂っているのは他のエリアとも変らないが、到るところに顔をもした石像や巨大な石塔などが建てられている。

一体誰がいつどんな目的でそれらが建てられたのか、様々な建造物がそこかしこに広がっている。

これも古代文明の名残なのだろうか。

こういった建造物が存在するということが過去に文明があったことがわかる。

そこに桃色の体色を持った巨大な飛竜が舞い降りる。

これら建造物が作られた時代には飛竜という存在はいたのだろうか。

イェンクックを狩ろうとこの場で戦っていた者はいたのだろうか。

そんな中、降りてくるイヤンクックめがけて、クラインは閃光玉を投げつけた。瞬間、辺りが閃光に包まれてイヤンクックの声がジャングルにこだまする。

大きな地鳴りが、イヤンクックを地面に落としたことを伝えて、慣れてきた目を辺りに向けてイヤンクックを確認する。

イヤンクックは目をつむり地面寝転がりながら脚をバタバタとさせている。

そこにめがけてクラインは片手剣を振り下ろしていく。

気がつけばイヤンクックの耳はポロポロになり耳の破壊が出来ているようだ。た。

どこかに素材が落ちているだろうか？

あとで拾おうにも今は狩りに集中していなければならない。ましてやこの巨大なモンスターを前に油断などできない。

先のエリアでは怒り状態のイヤンクックの攻撃をギリギリのところまで避けて、追いつまされさえもしていた。

エリア移動をしたイヤンクックを追う形でこのエリア2にやってきたが、あの怒り状態をみるになるだけ相手にスキを作らせないようにしなければ、あつという

間にこちらがやられてしまうのも容易に想像できた。

正直、あの怒り状態ではまともに攻撃できないことを悟ったクラインは、閃光玉や畏、タイミング次第では爆弾なども使っていこうと、戦略を立てていた。

尤も、それらがクラインの思い通りになるとも思えないが。

イヤクツクの視界が戻ってきたのか、体制を立て直しクラインに顔を向けて威嚇行動をしている。口の端からは炎が漏れて怒り状態に移ったことを伝える。

大きく仰け反り、イヤクツクの咆哮が再度クラインの鼓膜を突き刺す。

「ぐぎゃあああああああ！」

何度聞いてもこの咆哮には慣れない。人間が持つ根源的恐怖心を刺激するように、身体が硬直してしまう。

モンスターの咆哮はハンターで言うところの閃光玉と同等か。

次の瞬間にはイヤクツクはその巨体をクラインに突進させてきていた。とっさに横に避ける。

先程と同じ動き担ってしまったが、基本的なこの立ち回りになってしまいうだろう。怒り状態のときは、はっきり言って攻撃するスキが無い。

いっそのことベースキャンプに戻って怒りが収まるのを待ったほうがいいか？
そう思うも、この状態のイャンクックから逃げ切れるとも思えない。

イャンクックに背を向けるということが、どれほど恐ろしいことか、クラインは理解していた。

地面に身体を擦り付けながら突進を止めるイャンクックが、次に攻撃を開始するまでに約1秒ほど。

まったく攻撃を与えるスキを与えられない。

『もう一発閃光玉を当てるか?』

そう思ったものの、怒り状態のスピードに合わせて閃光玉を当てることはできないのか？

そもそも避けるので精一杯な状態で、閃光玉を投げる時間があるかも危うかった。
『こうなったら・・・』

マハトの姿を思い浮かべたクラインは、武器を抜刀状態にし、盾を構えた。

『マハトは相手の攻撃を受け流して攻撃のチャンスにしていた・・・』
ここ数ヶ月、共に狩りに出たマハトの姿を思い浮かべて、彼の立ち回りを思い出

していた。

マハトは常に攻撃を与えて、相手をひるませる戦法を得意とする。

力押しとでもいう無謀な戦法だと思ったものの、彼は本能的に効率的な狩りの仕方を見出していたのだろう。

攻撃を避けるときは、どうしても武器を納刀状態にしないと行けない。

武器の出し入れに取られる時間というものは、狩りの場においては無駄な時間だ。それを省いたのが敵の攻撃をやり過ぎして行うガード後の攻撃。

敵の攻撃を盾で受け流して、すぐさま攻撃へ転じる。

マハトの使う大剣は、その巨体ゆえ前方に構えれば盾としても使うことができる。もちろん、武器に負担はかかるものの大剣によるガードはなかなか有効だった。それを真似てみる。

クラインが使う片手剣という武器は剣と盾がセットになった武器で、攻守ともにバランスのいい武器となっている。

初心者ハンターが最初の使う武器としてよく選ばれ、クラインも例外では無かった。

ほとんどのハンターがある程度狩りに慣れてから他の武器を使い始めるが、クラインは片手剣を使い続けていた。

理由はその扱いやすさだろう。

盾のよる防御も、剣による攻撃も全てが軽くて機動性に優れていた。

マハトのような大剣は一撃が重い代わりに機動性に欠ける。

対してクラインは狩りはなるだけ動きやすい格好でモンスターを観察できるように片手剣を好んで使っている。

敵が攻撃を始めたタイミングで盾を構えて攻撃を待っていた。

巨体を猛ダッシュで突進させる攻撃。

目の前で攻撃を受けるといっものはとてつもなく怖い。しかし、これを乗り越えなければ行けないような気がした。

グガン!!

鈍い重い音と共に、盾を構えた腕に衝撃が走る。

ガードと言っても全身で突進を受け止めているのには変わりなく、若干のダメージは追ったものの、敵の僅かな攻撃のスキを確実につけていける。

クラインのすぐ後方に倒れ込んだイヤクックを確認して、そのまま飛んで斬りつける。

剣を握る腕を無心に振り回し、独特な鱗を斬りつける感覚を認める。

右足に横一閃の剣戟を与えた時、ちょうど立ち上がったイヤクックを転倒させた。

そのままクラインの眼前で倒れたイヤクックの頭が目の前にある。

鳥類独特の無表情で不気味な顔が目の前に現れた。

「うわああああああ!!」

クラインの咆哮は恐怖か、自分を鼓舞するための叫びか。

切りつけているうちに「クエエエ・・」と弱々しい声を上げたかと思うと、イヤクックは動かなくなった。

徐々に剣を振る速度を落として、イヤクックの姿を確認する。

目を開けたまま、さっきまでであった覇気がなくなっているようだった。

「たお・・した・・?」

絶命したのだろうか。微塵も動かなくなったイヤクックを認めるとクラインは

内からふつふつと何かが湧き上がってくる。

「やったああああ!!」

これだけ感情を顕にしたのはいつぶりだろうか？

戦っているうちは恐怖心半分の状態で戦っていて、なんとか攻撃をやり過ぎすの
に手一杯だった。

そして最後に出てきたのは歓喜の声だった。

始めて自分ひとりだけで大型モンスターを喜び、達成感。

マハトが言っていたのはこれだろうか？

ドスランポスを倒したときには感じれなかった喜びの感情。

巨大なモンスターを狩ることができるという人間の力。

ふとクラインは亡くなった両親のことを思い出していた。

ーココット村ー

「1週間経ったな・・・」

「フォッフフォッフ。毎日その調子じゃが、心配かの？」

マハトはまだ村にいた。

クラインがイヤンクック討伐出かけた日に同時に森と丘に狩りに出かけたマハトだったが、その依頼から帰ってきてからというものの、ずっと狩りに出ずに村にいたのだ。

理由はもちろんクラインだ。

「なんならメタペタットに行ってみてはどうじゃ？」

「もう1週間だから帰ってくるとしたらそろそろだろ？」

「帰ってくるのが不安ならお前さんも一緒に行ったら良かったのに」

そう、ただクラインの実力が不安であれば、いつも通り一緒に狩りに付いて行けばいい。

しかし、今回だけは違った。

「違うよ村長」

そう言い、マハトは次の言葉を口に出そうとした瞬間

「クラインが帰ってきたぞ〜！」

村の入り口にいる村人がそう叫び、マハトは言葉を飲み込んでとっさに村の入口に駆け出した。

「やれやれ、まったくわからんのお」

マハトは遠目からでもわかった。クラインの手に握られた麻袋が狩りの成功を証
拠付けるものだ。

あれはギルドから支給される報酬品を入れるための麻袋だったからだ。

猛ダッシュで駆け寄ってくるマハトを見て、クラインは照れくさそうに手を振っ
た。

幼馴染としてずっと一緒にいたクライン。

マハトは1年先にハンターになって先輩面をしていたが、これでやっとならば対等か。
それとも共に競い合うライバルの誕生としての喜びか。

そのどちらでもない。

一人の親友の確かな成長を、誰よりも先に祝ってやりたかった。

イヤクックだった1頭の狩猟。

ベテランハンターになればなるほどそう言う奴がいるかもしれない。

しかし、自分達駆け出しハンターにとっては確かな一歩だったのだ。

クラインの元までやってきたマハトは、拳を前に突き出す。

クラインも照れ笑いを正して、精悍な顔で拳を突き出した。

コロット村に生える巨大な木がそよそよと風に吹いて流れる。巨木の下にある岩にささった一本の剣が綺麗に光っていた。

第4話 サボテンの花を求めて『前編』

イヤンクック討伐から1ヶ月。ココット村は徐々に発展を遂げていた。しかしそんな中、とある流行病が村に蔓延していた。

〈登場人物紹介〉

・主人公

名前…クライン・クルーガー 15歳

武器…アサシンカリング

防具…ハンターシリーズ

名前…マハト・アルペンハイム 16歳

武器…ブレイズブレイド改

防具…ランポスシリーズ

村の流通はかなり安定してきた。

腕利きのハンターがしばらく滞在していなかったおかげで、目覚ましい発展が無いことがココット村の悩みの中の1つではあったものの、クラインの成長とマハトの帰還により、安定して依頼をこなせるようになったことで、村周辺の危険度も徐々に低くなってきた。

この世界での村や街の発展は、ハンターの有無によって大きく差が出る。腕利きのハンターがいれば、その村や街に依頼が流れて、経済が回るようになる。ハンターはこの世界の経済の中心的存在でもある。

ハンターの体力を回復させる回復役の調達や、罫の材料の仕入れなど、行商人が直にギルドに依頼して卸して貰っている。

そうやって世界は回っていた。

ココット村に流れてくる以来は主にクラインとマハトが受けることを前提としてギルドから送られてくる。

それ以外には村長の独断により依頼を発注するようにもなっていた。

元伝説的ハンターであるココット村の村長の顔利きか、ココット村もギルド出張所として昨日するようになってきた。

近々、村長が住む大きな家を、ミナガルデギルド出張所として機能させるような動きもある。

主に森と丘周辺の依頼を管理する役割を担うようだ。

そうになったのには、ミナガルデのギルドマスターである村長の兄弟が関係しているのだろう。

村長と瓜二つのミナガルデのギルドマスターは独特な訛りで喋る老人で、いつもミナガルデの酒場のカウンターにちょこんと座っている。

マハトがミナガルデにいたときは、見かけていたらしいが、本当に村長と瓜二つでなんだか村に帰ってきた雰囲気だったと語っていた。

徐々にではあるが村の状況も変わってきている。

ーココット村ー

村人は主に大体が商人であったり武器の加工屋など、何かしら皆、村で商売を営んでいる。

村はとても狭いコミュニティのため、誰が何かの職をすることが必須になってくる。

簡単な仕事としては近くの狩場に赴き、様々な資材、薬草などを取ってくる仕事などもある。

コcott村は《シルクオーレの森》や《シルトン丘陵》などが近い関係で薬草やキノコなどの資源に溢れている。

それを物流に流して稼ぐ方法がほとんどだ。

もちろん、彼らはハンターでは無いため、モンスターを狩る技術はない。そのため凶悪なモンスターが出ない場所を探索したり、時にはハンターを雇って採取に出かけたりする。

しかし、コcott村では手に入らない物資ももちろんある。

「まいったのお」

空を仰ぎ見て村長はしわくちゃな顔を歪めて言った。

「流通が増えたのは主にジャングル付近の物資じゃ。じゃがそれ以外の地域の物資が必要となるとまた話が変わってくるのお・・・」

現在、コcott村ではとある病気が流行していた。

一種の毒による病気で感染することはないが、その毒を体内から取り除かなければ

ば最悪の場合死に至ってしまふ。

幸い、解毒薬は調合で作れるので、最悪の自体は免れているのだが、それでも完治というわけにはいかなかった。

そこへ村長に呼ばれたクラインとマハトがやってくる。

「徐々に広がってるらしいね。」

そういったクラインは村長の家の前から村を一瞥する。

外に出ている村人は明らかに少なく、どこか活気も無くなっている。

コcott村を蝕んでいる奇病は、毒による高熱や身体の倦怠感など、普通の風邪と変らない症状を見せる。

しかし、治るには完全に体内から毒を除去しなければならないので《漢方薬》が必要になってくる。

「漢方薬を作るための《サボテンの花》じゃが、これはデデ砂漠などの砂漠地帯でしか自生しないのじゃ。」

通常の解毒薬よりも強力な解毒作用がある《漢方薬》はハンターも場合によっては狩りの場面に持っていくアイテムの一つではあるが、これの材料となる《サボテ

ンの花》は砂漠地帯でしか自生しない。

その砂漠への流通はまだ確保されておらず、依頼も回ってこないのので、依頼のついでに調達してくるといったこともできなかった。

そこで村長はクライン達を読んだのだ。

「なるほどね」

マハトがそう言って村長の考えを察したようだ。

「砂漠地帯の近くに《レクサーラ》という村がある。お主らにはそこに行ってもらい、砂漠から《サボテンの花》を取ってきてほしいのじゃ。あいにく、頼めるのはお前達くらいしかないからのお」

「直接レクサーラと連絡とって物資を送ってもらうことはできないの？」

クラインが単純な疑問を投げかける。

ある程度の物資であれば村同士で連絡を取り合い送ってもらうようにもできる。ましてや商隊などに頼めば目当ての物資も手に入れられるようにはなっているのだが。

「それがレクサーラの物資もどうやら枯渇気味らしくての。こちらまで流通できる

ほど人も物もおらんらしい。」

「あそこにはハンターがいないからの・・・。もしかしたら何かあったのかもしれない」
そこで、クライン達を派遣させて問題の確認と必要によっては解決するということだ。

「それが今回の依頼ね。」

腰に手を当てるようにして、自分を理解したクラインは、村長に言った。

「レクサーラまではメタペタットの商隊も向かわせる。彼らの荷車に乗ってレクサーラまで向かってくれ。」

村長はそう言って、村の入口に付近で待機している商隊の荷車をみた。

以前、リオレウスの襲撃から助けてメンバー達で、主に物資の調達などを行っている人達のような。

長距離を移動しても負担が無いように、クライン達とそう大差のない歳の若者が中心に構成されているようだ。

「すでに商隊の準備も出来ている。お主らは大丈夫か？」

この村長はいつもいじわるだ

準備なんてハンターたるものいつ何時も、何が起きてもいいようにしている、とあれだけ教え込まれている。

わざわざこんな試すようなこと。

クラインとマハトは同時に振り返り「行ってきます」を返事にして村長の元を去った。

ーココット村近辺ー

「エマ・レームクールです。よろしく」

商隊の中で唯一の女の子である彼女が最後の自己紹介だった。

商隊は全部で4人。

リーダーである《デニス》

荷車を引くアプトノスの世話係兼運転士《アントン》

元ハンターで小型モンスターなどの対処を行う《ウッツ》

そして商隊の経理などを担う《エマ》

この4名がココット村に資材を持ってくる主な商隊だった。

以前のリオレウスの襲撃の際に、一通り商隊のメンバーとは顔を合わせていたが

名前を全員覚えていたわけでは無かったので、改めての挨拶となった。

「あの・・以前は助けていただき・・ありがとうございます・・！」

突然お礼を言われたクラインはたじろいだが、よくよく顔を見てみるとその少女はクラインが以前リオレウス襲撃の時に、『森と丘』の奥のエリアで助けた商隊の一人だった。

「あ、ああ・・」

返事にならない返事をしてしまったクラインは、気まずい空気に耐えきれずマハトの方に目をやる。

マハトは呆れた風にクラインに視線を返してその目は「もっと気の利いたことを言えよ・・」と言っているようだった。

「とにかく無事で良かった・・です・・」

ハンターという職業柄、こうやって他人から感謝されることはあるかもしれないが、こうも直接、こんな近い距離で言われたのは初めてのことだった。

そこへ商隊のリーダーであるデニスが、クラインとマハトの元へやってきた。

揺れる荷車の中で、バランスよく歩いてくるデニスはブロンドの綺麗な髪をして

いて、さながら上流階級のそれに見紛うほど綺麗な顔立ちだった。

「僕からお礼を言いたい。本当にエマを救ってくれてありがとう。」

そう言って、手を差し出したクラインは少し迷ったものの、デニスの手を握り返した。

「あの時は本当にもうダメかと思っていた。ココット村なんかに行かなければ良かったって何度も思ったさ。」

そう言うデニスの口調は憎悪が入り交じる声音で、当時の緊迫感が伝わってきた。

「マハト君もよく頑張ってくれた。新米のハンターと聞いて多少不安には感じたが、よく無事に助け出してくれたものだ・・・」

その言葉には多少の皮肉もあるように思えて、マハトが殺気立つのを感じる。

これ以上こいつに喋らすとまずいと思い、クラインはマハトの気が反れるように声を発す。

「大したことじゃないよ。あの時は俺も必死だったんだ。俺だけの力じゃない」

そう言って、少しでもマハトの気を鎮めようとした。

「ともあれ、君の活躍によりエマはここにいれる。本当にありがとう。」

すっと立ち上がり、デニスエマの隣に座り込んだ。

この二人はきつとそういう関係なのだろう。

そう思うも特にそこに突っ込むことはしなかった。

「ふわあぁ」

大きなあくびをして、マハトは後ろの荷車の方へ向かう。

この荷車は全部で5つの編成になっており、それぞれがアプトノスに牽かれて移動している。

先頭の荷車をアプトンがアプトノスに駆り操縦し、その後ろを他のアプトノスが着いていくように調教されている。

それぞれの荷車は十分な物資を格納できる広さを有しているが、それとは別に人が寝れるように寝具も設置されている。

エマが女性ということもあり、彼女用の部屋も用意されている。

それ以外は、残りの商隊メンバーが寝る用の荷車と、ハンター達が寝る荷車も用意されている。

外敵からの襲撃を懸念して、夜ねる時は、それぞれ見張り番となる者が起きてい

る手はずになっている。

その場合は、備え付けの簡単なボウガンや、音爆弾などを備えている。

しかし、夜に寝るのはとても危険なので、今日中に中継地点となるメタペタットまでたどり着くのを目的としている。

マハトは自分の寝具に戻り寝るようだった。

「到着まで俺らハンターはやることないだろ？俺たちの仕事はあくまで《デデ砂漠》の探索だ。到着までゆっくりさせてもらうぜ。」

行こうぜ、クライン。そうやってマハトは自分達に貸し与えられている荷車へ向かった。

荷車はそれぞれ繋がれており、直接行き来することができる。

移動する家のようなものだ。

「じゃあ、うちのリーダーがそう言っているので」

そう言ってクラインはマハトの後を追いかけた。

「何様のつもりだ・・・？」

デニスにはクラインの後ろ姿が見えなくなるのを確認してからそう声にだした。

「そんな言い方はないんじゃない？」

隣に座っていたエマがそう注意する。

「あいつら、ハンターが一番偉いんだって思ってたんだ。あいつらが狩りに使ってる葉草や資材の供給は誰がやっているとってる？俺たち商隊がいなきゃ、あいつらは狩場で野垂れ死んでるんだよ・・・！」

クラインたちが消えた先の荷車に向かってあえて聞こえるように、大きな声でそんなことを叫んでいた。

―後方の荷車―

「エツラそんな隊長だなあ！」

ドカッと麻の上に寝そべったマハトは、あえて聞こえるように、大きな声でそんなことを叫んだ。

「まあ、性格悪いよな、あいつ」

「プライドが高いんだろ？ただでさえ低いプライドなのにな」
床を伝ってドンツと隣から音が聞こえてきた。

隣の荷車でデニス床を殴ったのだろう。

車両自体別々だが、寢床になっている荷車は連結されており、ある程度の物音は伝わるようになっていた。

出発当初から薄々感づいていたが、デニスにはハンターに対して下に見ている傾向があるようだ。

クライン達は職業ごとに上下の差は無いと考えているが、デニスの態度には少なからず不快感は抱いてしまう。

「たまにいますよ。自分の職業至高主義なやつ。」

マハトは特にデニスに対する不快感を表していて、乗車してからいつ一発触発するかとクラインはヒヤヒヤしていた。

それはどうやら隣にいた商人の女の子エマも一緒だろう。

お互いの不穏な雰囲気を感じてかクラインにお礼を言ったようにも思うが、本心ももちろんあっただろう。

しかしそれにはいいきっかけになってしまったようだ。

無理矢理にでも皮肉を言ってやろうと気が満々で、待ってましたと言わんばかりに会話に混じってきたからだ。

マハトに対して当たりが強い言い方になっていただろうが、クラインに対してはただの建前だろう。

ハンターに窮地を救われても素直にお礼も言えない人でも一商隊の隊長にもなれるのか。

人間性と仕事の質は比例しないらしい。

ハンターにも似たような人がいるのかもしれないが。

「なあ、クラインお前もまさかハンターが一番えらい職業なんて思ってないだろうな」

「まさか!? そりゃ尊敬できる職業だとは思うけど、この世界の役割の一つだろ」
役割の一つ。というのは村長からの教えだった。

村長はハンターという職業は世界に必要な職業の一つでしかない。

モンスターを狩れるハンターという役割がいなければ、人間は生きる事はできないだろう。しかし、みんなみんなハンターであっては、人間は生きていけない。

だからこそ、ハンターを補助するために商人がいて、物資を各村に流す役割がある。

各所の依頼をまとめるためにハンターズギルドが存在する。

そうやって人間はそれぞれが役割を意識して連携して生きることまで成長してきたと思う。

村の発展にハンターは必要不可欠と言われるが、商人や村長も必要不可欠でもある。

ハンターの活躍がきっかけとなり、商人という職業が活き、村長の采配が重要になってくるのである。

そんなことを村長が教えてくれたのを覚えている。

先程、マハトがデニスの前を去るときに「俺たちの仕事は」と言ったが、まさにこのことでもあった。

「このままバカにされたまんまも癩だから、さっさと仕事済ませて村に帰ろうぜクライン」

マハトはゆっくりと目を閉じてそのまま眠ってしまった。

整備されていない荒れた道を行くアプトノス車は、心地いい揺れをクライン達に感じさせながら、熱帯の地レクサーラを目指すのであった。

ーレクサーラー

ココット村から森と丘を超え、一晩メタペタットで明かして数日。

熱砂舞う地《レクサーラー》に到着したクライン一行。

彼らは村に到着してからすぐにその異変に気がついた。

レクサーラーという村は砂漠のオアシスに築かれた村で、砂漠地帯の狩場に向かうハンターの経由地点として使われる。そのため、一時的にハンターが寝泊まりできる施設や規模は小さいが出張ギルドも存在する。

ここより南は常に砂嵐が吹き荒れており、人が立ち入ることができない未開の地となっており、そこを迂回してデデ砂漠へ向かう。

ハンターの経由地点とされている関係上、常にハンターが行き交う村であるにも関わらず、クライン達が到着した時にはまったくと言っていいほど、ハンターが見当たらなかった。

「ここがレクサーラー？噂に聞いていたのと全然違う・・・」

クラインが疑問に思ったことを口にして、マハトは黙って村を一瞥した。

荷車から商隊のリーダーであるデニスが出てきて、この村で一際大きな建物へ向

かう。

レクサーラの建造物は、ココット村のように木材で建てられたような家ではなく砂岩で作られた家がほとんどで、その他にテントを張った家なども存在する。

デニスが向かった家は、村で最も大きい赤い砂岩で作られた家だ。おそらくこの村の長の家だろう。

デニスに連なつて、他の商隊のメンバーが後に続く。最後尾には商隊唯一の女性エマがいた。

旅の途中、幾度となく衝突するデニスとマハトを鎮めたのは、このエマだった。高飛車なデニスに対して、最初こそ冷静に対処していたマハトであったが、日数を重ねて行くにつれて、抑えきれなくなっていた。

モンスターで言うところの怒り状態よろしくになったマハトだったが、間に女性が入ることで、いくらか冷静にもなれた。そういう意味では一番世話になっているのは、エマだろう。

「・・・」

マハトは黙って商隊達の後ろ姿を見つめていた。

「マハト、こっからはやっとなんたの出番だ」

それを見ていたクラインはマハトの方をポンと叩いて、気を紛らわしてやろうと思っただ。

「はあ〜」

ため息を吐いてマハトは「そうだな」とだけ返した。

「それよりも気になるのはこの村だよ」

そう言ってクラインはレクサーラの村を見回した。

この村は砂漠のオアシスに気づかれた村で、砂漠地帯に向かうハンターの経由点としての機能を持つ村だ。

ハンターのための商店や宿が完備されており、そこかしこにハンターがいてもいいはずだが、今この村には不自然なほどに人っ子一人いない。

ココット村を出る時に村長が言っていた通り、物資が枯渇しているというのも、なにか関係があるのかもしれないと、クラインは考えていた。

「俺も何度かこのレクサーラに来たことはあるけど、ハンターがたくさんいたはずだぜ」

マハトも違和感には気づいていたようで、クラインに以前レクサーラに来たときの状況を伝えた。

「なにかあったとしか思えない・・・」

そう言ってマハトは先程デニス達が入っていったレクサーラの村長の家を見た。マハトの目線に釣られるようにクラインも赤レンガでできた村長の家を見やると、デニス達が家から出てきた。

デニス達は扉から出て来たときから、クライン達と目を合わせており、何かいたげな表情をこちらに向けている。

ゆっくりと近づいてくるデニスを見て、クライン達は次の言葉を待った。

「良かったな。お前らにも仕事だ。頑張れよ、立派なハンターさん」

ーデデ砂漠ー

無限に広がるように見える大きさ砂原。直射日光が降り注ぎ、立っているだけで体力を奪われる広大な砂漠にクライン達は来ていた。

「俺始めてだ。《森と丘》以外の狩場に来るの」

「そっか、お前ずっと村の仕事だけだったもんな」

話をしながらベースキャンプで準備を整えるクラインとマハト。レクサーラに到着してまもなく、クライン達はレクサーラからほど近いこの《砂漠岩地》という狩場にやってきていた。

レクサーラの村長と話しをしていたデニス商隊は、砂漠の物資流通の交渉しようとしたものの、最近多発している砂漠岩地でのモンスター大量繁殖に悩まされていたようだ。

そのおかげで、レクサーラの商隊も思うように物資を調達できずにいたようだ。

「村長は知ってて俺たちを寄越したのか・・・」

「あのじいさんのことだ。ロクに説明なんかしてくれないさ。」

とりあえずやれってスタンスだからな。そう続けてマハトは支給品ボックスから一つの瓶を取り出した。

「ほらクライン。コレ飲んでおけ」

ヒョイツと投げられた瓶を受け取ると、ひんやりと冷たく、触っただけでこの砂漠の暑さを若干軽減させてくれた。

「これって？」

「クーラードリンクさ。こういった暑い狩場では、立っているだけでも暑さで体力をやられちまう。その暑さを軽減させるための飲み物さ。」

クラインはへえ〜と言ひ、渡された瓶を軽く振ってみた。カラカラと音がして、白い液体の中に氷のような物体が見える。

これは氷結晶というもので、寒冷地対や洞窟なので採掘できる鉱石だ。どんなに高温にさらされてもなぜか溶けない氷とされ、氷属性の武器の材料としても使われることも多い。

この氷結晶とにが虫のエキスを調合することで、このクーラードリンクが完成する。ちなみに、今回目的としている《サボテンの花》と《にが虫》を調合することで、解毒薬を作ることができる。

「これが先人の知恵ってやつか・・・」

クラインが感心しながらクーラードリンクを一気に飲み干す。喉を通った瞬間、体内の器官という器官すべてに冷たいひんやりとした感覚が行き渡り、一気に体温が変化したことにより、少し身体をブルッとさせた。

「これ腹壊したりしない？」

あまりの冷えように少し心配してクラインはマハトに聞いた。

「ハッハッハ！大丈夫さ」

マハトは笑いながら借りの準備を進めていた。

クラインは始めての狩場ということもあり、入念に砂漠の地図を確認する。

「さて、それじゃあ、目標を探しに行くか」

マハトが大剣・ブレイズブレイド改を背負ってクラインに声を掛けた。

ーエリア2ー

ベースキャンプからは二通りの道を通じてそれぞれ違う狩場に繋がっている。一つはベースキャンプを下ったところから広大な砂漠地帯に通じる道。そしてもう一つは地底湖エリアや、岩地が存在するエリア。ここではある程度日射を防いでおり、砂漠による太陽の照り返しもないためクーラードリンクは不要である。

クライン達はまずエリア2である大きな砂漠地帯からの探索を始めた。

今回の仕事は、砂漠に突如として大量発生した《ゲネポス》の討伐だ。

この砂漠岩地には主に《ゲネポス》と《ガレオス》という小型モンスターと、そのボスが徘徊している狩場だ。

《ガレオス》とは砂丘を泳ぎ回る魚竜種に分類されるモンスターで、砂漠を自由に泳ぎ回り、集団で獲物を囲い込み狩りを行う。

対して《ゲネポス》は主に岩地の方を生業とし、これまた《ドスゲネポス》を筆頭に、群れの住処を守っている。

砂漠地帯の《ガレオス》と、岩地の《ゲネポス》とで半分割にすることで、この砂漠岩地の生態系はバランスを保っていた。

しかし、ここ最近砂漠岩地の生態系に偏りが見られ、《ゲネポス》が砂漠地帯にまで侵食してきたようだ。

砂漠地帯には、《ガレオス》と《ゲネポス》両方がせめぎ合う場所となっており、危険度が大幅にましていったようだ。

このことから、レクサーラもミナガルデギルドに依頼を発注。しかし、どのハンターも依頼に失敗し、中には帰還できなかったものもないことから、まともな調査が進まずにいたのだ。

「それにしてもよりによって俺らなんて・・・」

クラインは、まだハンターとしてまともに狩りを始めて半年ほどといキャリア

だ。その不安をつい口にしてしまふ。

「まあ、村長も俺らだったら大丈夫だと思って商隊について行けって言ったんだと思うぜ。それに今回の依頼は大型モンスターの討伐じゃない。あくまでゲネポスの討伐だ。ある程度、数を減らしてサボテンの花を採って帰ろうぜ」

そうだ、もともと自分たちがこの砂漠岩地にやってきたのは、解毒作用があるという《サボテンの花》を採取することにある。

それを持ち帰り村に持ち帰ることが、今回のココット村村長からの依頼だ。

そして、このゲネポス討伐はレクサーラからの直接の依頼。

「大型モンスターの討伐でないだけに、少し安心だな」

「油断はするもんじゃないぞ。クライン」

砂漠地帯にでると、照りつける太陽と、照り返しによる暑さがクラインを襲った。

「これはクーラードリンク無いとどうかするところだった・・・」

クーラードリンクである程度の暑さをしのげているとはいえど、暑いと感じるのは十分過ぎる熱気が充満していた。

そして、どこまでも広がるように見える砂漠には、見慣れた。しかしどこかズレ

を感じさせるシルエットがあった。

「あれがゲネポス・・」

クラインの視線の先には、今回の依頼のターゲットである《ゲネポス》が見えた。ゲネポスは鳥竜種に分類され、ランポスの亜種としてされているモンスターである。クラインが《森と丘》でよく戦ったランポスと、よく似ているが、性質は大きく異なる。

まず、特徴であり驚異とされるのは鋭い牙や爪から分泌される強力な麻痺性の毒である。ゲネポスの特徴はこの麻痺性の毒によるもので、自分よりも10倍近い体重をもつモンスターですら、この毒により拘束し捕食することもできる。

攻撃と同時にこの毒を打ち込むことができるので、攻撃を食らうことだけはなんとかしても避けたいところである。

ちなみに、この毒はあくまで相手の運動性能を奪うだけであり、視覚や触覚、痛覚までも奪うものではないため、捕食対象者は、自らが食べられていく感覚を体験することになる。

その体験は想像を絶するものであろう。

「気を付けろよクライン！」

マハトは背中の大剣の柄に手を添えて走り出す。

大剣を扱うマハトはある程度の間合いを保てるため、果敢に攻め、自信の反射神経を頼りに敵の攻撃を避けるスタイルを得意とする。

対して片手剣を扱うクラインは、ヒット・アンド・アウェイを得意とし、相手の行動パターンを分析し、ダメージを蓄積させる戦い方だ。

どちらも一長一短ではあるものの、相手により得手不得手は出てくる。

今回の場合、ゲネポスの麻痺毒には十分な注意を払わなければ、一発である世送りになる場合もある。

それを踏まえると、クラインの方がこういった小型モンスターの討伐には向いていると言えた。しかし

「ガアアアア！」

クライン達のいた場所から更に奥。エリア2の方面から、ゲネポス特有の金切り声が聞こえてきた。

クラインが声に気づいて目線を向けると、遠くからでも見てわかるほど、立派な

トサカを持つ個体のゲネポスがいた。

「まさか・・!?」

「やっぱり、いやがったか」

3匹のゲネポスの群れに向かっていている最中。その奥からドスゲネポスが現れた。

「普通、このエリアにドスゲネポスが来ることはないんだがな。」

「どうする？マハト？」

「おれがあいつの相手をする。クラインは周りのちっこいのを頼む！」

「わかった！」

とっさとはいえ、どんな状況でも対処しなければならない。

土壇場での狩りの対応が今後の狩りに影響してくる。

ここは、経験が多いマハトに大物を相手にさせるのは、得策だとクラインも判断した。

マハトは、飛びかかるゲネポスの攻撃を避けて、その奥にいる《ドスゲネポス》へと向かう。

3頭のゲネポスがマハトに気を取られている間に、クラインはその内の一頭に

抜刀しながら飛びかかった。

ブシユツ

以前よりも威力をました片手剣《アサシンカリング》の刃が、一匹のゲネポスに致命傷を与えた。

ゲネポスの断末魔に気が付き、他のゲネポスもクラインの方向へと身体を向けた。このまま、攻め込んで他の2頭も仕留める。

そう思い、クラインは残り2頭のうち一匹に狙いを定め、振り下ろした刃を上に向けて切り上げを行う。

その切っ先が確実にゲネポスの顎にヒットしたと思った瞬間。

クラインは鈍い衝撃を右半身に感じて、気がつけば砂の上を転がっていた。

「ッ・・・!!」

耳元でズシャッという音を聞き、思わぬ方向から与えられた攻撃に虚を疲れる。

『一体・・・なに・・・』

急いで体制を立て直して、口の中の砂をペッと吐き出しながら、攻撃された方向を見る。

しかし、先程クラインが立っていたであろう場所には2頭のゲネポスがいるのみで他には何もなかった。ただただ広大な砂漠がゲネポスの背後に広がっている。

『何だ？何が起こった？』

正体不明の攻撃に動揺しながらも、クラインは2頭のゲネポスに集中しようとしていた。しかし直後、クラインの耳に、ゲネポスとはまた別の、モンスターの鳴き声が入ってきた。

聞こえてきた右に方向に目を向けると、サーっという音とともに、黒ずんだヒレのようなものが見える。

『ガレオス・・！』

そう、この砂漠には主に2体の凶暴な小型モンスターが生息している。

一体が、今回の依頼の標的である《ゲネポス》

そしてもう一体がもともとこの砂漠地帯を縄張りとしている砂竜《ガレオス》だ。

『同時にガレオスにも気を向けないといけないのか・・』

広大な砂漠を縦横無尽に及び回るガレオスの群れと、地上を闊歩するゲネポスとの同時狩猟。

まだ経験の少ないクラインにとって、辛く困難な狩りであった。

―＊―

『まずいな・・』

ドスゲネポスとの攻防を続けるマハトであったが、ガレオスの存在には気がついてた。

砂漠での狩りの経験があるマハトは、砂漠地帯に足を踏み入れたタイミングでガレオスが泳ぐヒレの数を確認していた。

目視で確認できただけで4つ。つまり少なくとも4匹のガレオスがこの砂漠地帯に存在していることになる。

通常、岩地地帯を縄張りとしているゲネポスたちがこの砂漠に出てくることは無いのだが、今回の場合はある程度の推測ができる。

ドスゲネポスがこの砂漠地帯に現れたところを見ると、ゲネポスの群れがガレオス達よりも優れていることになる。

縄張り争いの末、ゲネポスがこの砂漠岩地全体を統治しており、徐々にガレオスが淘汰されていることになる。

ガレオス達にも、群れのボスとなる《ドスガレオス》が存在するが、この場合《ドスガレオス》はこの《ドスゲネポス》に倒されたと考えられる。

それにより、ゲネポスたちは生息域を一気に広げることができた。そして今回のゲネポスの大量繁殖である。

そう考えるとこの《ドスゲネポス》は通常の個体よりもさらに強い個体であることが伺える。

そんな通常よりも強い個体である《ドスゲネポス》を相手にしながら、後ろでクラインと交戦しているゲネポスにも注意を配り、同時のいガレオスにも注意を向けないといけない。

一切の障害物が存在しない砂漠地帯において、全方位からの攻撃の危険にさらされていることになる。

1人での狩りであれば、一度ベースキャンプに戻っていたことだろう。

マハトはドスゲネポスの攻撃を交わしながら、《ドスゲネポス》にダメージを与えていく。

幸い、マハトの扱う大剣は攻撃範囲が広く、取り回しによっては周囲一体を攻撃

範囲にできることで、ある程度の距離であれば、敵が近寄りにくくなっている。

しかし、『ガレオス』の方は砂中に潜っての攻撃を主とするので、気は抜けない。たまに距離を取り、ガレオスとの距離、数などを把握する。

ちらっと視界に入ったクラインだが、彼もガレオスとゲネポスとの同時攻撃には苦戦しているようだった。

理想としては、2人でドスゲネポスの撃退に回れたらいいのだが、この状況下ではそれはあくまでも理想であり、ドスゲネポスとゲネポスの群れを離すことのほうが重要だった。

始めてガレオスと対峙するクラインにとって、ガレオスの攻撃は予想できないものばかりだろう。

砂中に潜り音もなく近寄り、砂ブレスによる攻撃。そしてまた砂に潜って攻撃をすることができない。

マハトも以前、別の依頼でガレオスの『魚竜のキモ』を集めに来たときはかなり手を焼いていた。

『なんとかしてこのドスゲネポスをここから遠ざけないと・・・』

《ゲネポス》と比較して大きく発達した爪や牙。そして跳躍力は驚異的で、一気に間合いを詰められることもある。小回りがきき、動きが素早いだけに、大きな一撃を加えるのも、なかなか難しかった。

「ちよこまかっつ…！」

大剣を薙ぎ払って周囲からのモンスターの接近を牽制しながら、ドスゲネポスにも攻撃を与えていく。

ドスゲネポスの鱗にはあまりダメージを与えられないが、それでも両者の距離を保つには十分な攻撃だった。

ドスゲネポスはマハトの攻撃により、後ろに大きく跳躍してこちらを伺っている。彼奴の視界には、後方にいるであろうクライントそれと対峙するゲネポスの群れが映っているであろう。

モンスターにどれほどの思考回路があり、感情があるのかはわからないが、いつクラインのところに行くかもわからない。それを防ぐためにも、マハトはここでドスゲネポスを引き止めておかなければならない。

「ギャアア！ギャアア！」

突然、ドスゲネポスが鳴き声を上げたかと思うと、突然踵を返して、マハトの前から退散した。

「:!!」

十分なダメージを与えたがゆえの退散か？

安堵したマハトは、そのままクラインのもとへ助太刀に向かおうと、後方を振り返る。

すると、1体のゲネポスの死骸が横たわっていた。

「ふうっ:」

クラインが息を着いて、彼の足元には残り2体のゲネポスと、ついでガレオスの死骸が横たわっていた。

「クライン:!!よくやったな!」

行き過ぎた心配だったか、クラインはすでにイヤンクックとも渡り合えるほどハスターに成長している。

「マハトがドスゲネポスをひきつけてくれたおかげだよ」

そう言って、クラインは懐から剥ぎ取りナイフを取り出し、今倒したモンスター

の素材を剥ぎ取り始めた。

ーベースキャンプー

一度、ベースキャンプに戻ってきてたクライン達は、現状を整理した。

砂漠地帯一体の被害状況について。

ゲネポスの大量発生により物資調達が思うように行かなくなったわけだが、その原因はロスゲネポスの出現と紐付けることはできる。

しかし、マハトが戦ってみた印象としては、あのロスゲネポスはそこまで強い感覚はなく、なぜ岩地帯に生息しているゲネポスが砂漠にまで及んでいるのかまでは、不明だ。

少なくとも、あのロスゲネポスの討伐も依頼の範疇に加えないと物資不足の原因は打破できないという結果になった。

「ただ、気になるのは生態系を脅かすほど、あのロスゲネポスが強いって印象はなかったな」

マハトがロスゲネポスと対峙して思った率直な感想だった。普段生息しない地域

に進出するモンスターは、異様に強くなった個体で、その地域一体の生態系を破壊してしまおう。

そのために、ハンターがギルドから依頼を受けて、そういった凶暴化したモンスター。生態系を壊しかねない個体をハントする。

おそらく、今回の一連の状況もそれに起因するはずだと、マハトは思っていた。「とりあえず、あのドスゲネポスの討伐を狩ろう。おそらくそれが最善だ」

「わかった」

今回の依頼は、ゲネポスの討伐だが、依頼の根本としては、砂漠の安全確保。

そういう意味では、ここではドスゲネポスの討伐は絶対になるだろう。

ましてや、自分たちも村長に頼まれた《サボテンの花》を見つけなければならぬ。
い。

「まずは岩地地帯でゲネポスを狩りながらボスが来るのを待とう。砂漠の方にでるのは危険だからな」

「わかった」

クライン達は、再びアイテムなどを補充し砂漠地帯とつながる道とは逆の道か

ら、岩地地帯を目指すことにした。

ーエリア1ー

ベースキャンプから北に抜けると、ここデデ砂漠の岩地地帯へとでることができ
る。

先程のエリア2の広大な砂漠地帯とはうって変わり、大変狭く、逆に大型モン
スターも立ち入らないエリアとなっている。

ベースキャンプが建てられるエリアは、モンスターが侵入できない、もしくはし
づらい場所に建てられ、一応安全な場所とされている。

そのため、ベースキャンプと隣接するエリアには、凶暴な小型モンスターも少な
く、温厚な草食モンスターが生息域としているエリアが多い。

ここも例外ではなく、クライン達のいるこのエリアも、《アプケロス》と呼ばれ
る草食種モンスターがいた。

アプトノスと近縁種とされているが、縄張り意識が強く攻撃的なのが特徴である。
しかし、縄張りに侵入し危害を加えなければ、攻撃をしてくることはないので、

ほぼ無害と言っている。

クライン達は、そのままエリア1を抜けて、エリア4へ抜けた。

こちらは、先程のエリアよりも広く、岩地帯では最も広いエリアとされている。大型モンスターも現れることがあり、もっぱら凶暴なモンスターが生息するのは、こちらのエリアで案の定ゲネポスもこのエリアに存在した。

そして、その中心一体、ひととき大きなトサカを持ったゲネポスが1頭。

「いやがった……」

クラインとマハトはほぼ同時に、ドスゲネポスの存在を認め、それぞれ得物の柄を握る。

「狙うわドスゲネポス1頭だ。いいな。クライン」

「オーケー……!」

ダツとマハトが駆け出して、ドスゲネポスに近づく。

それを追うように、クラインが続く。周りのゲネポスがクライン達に気が付き、威嚇の鳴き声を上げた。

あたりから、鳴き声が上がリ、ゲネポスの群れが警戒しだす。

ドスゲネポスも向かってくるマハトに向き、迎え撃つ構えに入っている。

マハトは、走り出した勢いのまま、抜刀しドスゲネポスに真正面から思い一撃を食らわす。

血しぶきが上がり、同時にドスゲネポスの鳴き声が上がった。

クラインはマハトが一撃を与えた次のタイミングで攻撃を仕掛ける。

1撃2撃と剣を振り回して攻撃を加えていく。

マハトの大剣は一撃離脱のヒット・アンド・アウェイ。

そのスキをクラインが埋めるコンビネーション攻撃を仕掛けていく。

ドスゲネポスがやられている間、周りのゲネポスは攻撃を仕掛けようとする。

腰を低く構え、飛びかかりの姿勢にかまえていた。

いくつか攻撃を与えたクラインはそのまま、ゲネポスの方に向かい、更に攻撃を加える。

そしてその間に体制を立て直したマハトがドスゲネポスに攻撃を与えていく。

砂漠で戦ったときと違い、こちらから先制を掛けられたことは、クライン達にとって大きなアドバンテージとなっていた。

「クライン！このまま攻めていくぞ!!」

「うん!.....!?!」

クラインがマハトに返事をした同タイミングである。エリアの奥の方。地底湖へとつながる方向に、もう一つひととき大きなゲネポスの影が見えた。

その影が大きく2回吠え、姿勢を低くしてこちらに向かってきた。

「まさか!?!」

「2体いたのか?」

奥から現れたのは今戦っている個体とはまた別のドスゲネロスであった。

「だから、ゲネロスが異常繁殖していたのか!」

今砂漠で起きている異常事態。その原因はこの2体のドスゲネロスによるものであることがわかったクライン達。

この2体のドスゲネロスがいることで、ガレオスなど他生物が淘汰されてしまったのであろう。

『どうする?いま両方討伐するか?しかし...』

有利だと思っていた盤面が一気に覆ってしまったこともそうだが、ゲネロス対峙に来たつもりが、ドスゲネロスの討伐、しかも2頭ともなれば負担が大きくなっ

てしまう。

「マハト！俺がもう一頭を相手する！」

クラインは、もう一頭のドスゲネポスに駆け寄り、マハトに近づけさせまいとする。

「それしかないかつ…！」

マハトはそのまま、目の前の1頭目のドスゲネポスに向き合う。

その時、砂漠へとつながる道で、砂塵が舞うのが目に止まった。

「…？」

途端、地響きが鳴り響き地面が割れるのが目に入った。

反射的にマハトは横に転がる。次の瞬間には、もともとマハトがいた地面が割れて、大きな魚のような影が現れた。

同じ位置にいたドスゲネポスが断末魔の叫びを上げ、現れたその口元に収まり、力なく息絶える。

「ドス…ガレオス…？」

第5話 サボテンの花を求めて『後編』

村長に頼まれてサボテンの花を調達するため、砂漠岩地に出向いたクライン一行。ゲネポス討伐にやってきたクライン達だったが、ドスゲネポス、ドスガレオスが現れて、一度撤退することになった

〈登場人物紹介〉

・主人公

名前…クライン・クルーガー 15歳

武器…アサシンカリンガ

防具…ハンターシリーズ

名前…マハト・アルペンハイム 16歳

武器…ブレイズブレイド改

防具…ランポスシリーズ

―レクサーラ―

「ドスゲネポスにドスガレオスか…」

レクサーラの村長は、クライン達の報告を聞いて、フウとため息をついた。

「少なくともドス級が3体もいた。あの状況じゃ砂漠はまさにカオスだな」

マハトが言う。

同じ狩場に大型モンスターが複数いることは珍しいことではない。各狩場には生態系が存在し、それぞれがそれぞれの縄張りを持ち、共存している。ある程度のバランスは保たれており、生態系で見るとゲネポスとガレオスはほぼ同一の力を持ち、その上に飛竜種などモンスターが存在し生態系が成されている。

ゲネポスやガレオスはそれぞれの縄張りで生き、特に強い個体、生き残った個体などがドス級へと進化するというのが通説だ。

厳密にはドス級のモンスターがどういった過程で誕生するのか、詳しいことはわかっていないが、群れの中でも特に強い個体がドス級へと成長するとされている。

もちろん、ドス級がいる群れはより強くなり、外敵に狙われにくくなる関係から今回のように大量繁殖をすることもある。

しかし、今回の事例はドスゲネポスが2頭存在しながら、ドスガレオスも同様の縄張りにいたことが疑問視される。

「生態系に異常が発生したってこと・・・？」

クラインはそうつぶやき、砂漠岩地で起きている現状について整理し始める。

「ゲネポスの大量繁殖は、ドスゲネポス2頭の出現によるもの。あれだけ大量の群れが発生したにも関わらず、ドスガレオスも同様に生息しているという・・・」

「端から見れば奇っ怪な現象とも言えるがの・・・。ドスガレオス自体、岩地にすることは珍しくはない。しかしドスガレオスという存在がおりながら、ドスゲネポスが2頭も現れるということは滅多に無い・・・。」

「最近の砂漠の異常事態も奴らが原因ってことだよな」

先程、レクサーラの村長から聞いた話によると、ここ最近の砂漠岩地は大量のゲネポスにより、まともな資源調達が叶わなかったそうだ。

もちろん、すでにミナガルデギルドにはハンターによる討伐依頼も出しているが。それでも砂漠に現れた謎のモンスターによって尽く失敗に終わっていたようだ。「てことはその謎のモンスターってのはあのドスガレオスってところかな・・・。」

あれだけゲネポスがいるんだ。ガレオスのボスがいるなんて考えに至らないんだろうな。」

ま、経験の少ないハンターだったんだろうな。とマハトは話を区切る。

「ともかく、再度お主らに依頼を頼みたい。わしからの直々の依頼じゃ！ドスガレオスとドスゲネポスの討伐。これを正式にお主らに頼もうと思う」

「今この村にあるだけの物資で、できるだけの準備はしていこう……。クライン！」

「罨や閃光玉、あとは音爆弾の準備だね」

「ああ、出発は明日の朝イチだな」

そのままマハトは村長の家を出ていった。おそらく仮宿に戻って休むつもりだろう。

明日の狩りではクラインは主にサポートに回る予定だ。罨や音爆弾などの道具でモンスターの動きを縛りつつ、マハトが攻撃を加えていく。

もともと、片手剣という武器の性質上、小回りの効くサポート役を買って出る場合が多くなる。2人以上のパーティともなればなおさらだ。

クラインは、レクサーラにある物資をなるだけ調達しようと、マハトの背中を見

送った後に家を後にしようとする。するとマハトと入れ違うかのように、ココットの商隊のリーダーであるデニスが村長の家に入ってきた。

「よう。ハンター君。どうやら失敗したようだな」

こういった憎まれ口を叩くのがこのデニスという男だ。ココット村からレクサーラに向かう荷車の中で、半月を共に過ごし、毎日のようにこの憎まれ口を聞いてきたせいか、幾分慣れてしまっている。クラインの中ではこういった言葉はすべて彼なりの“挨拶”であると受け取っていた。

「まあね。まいったよ。いきなり大きなモンスターが現れたんだから」

「あの火竜を相手にしたお前でも、手を巻いた相手ってことか？」

「・・・」

クラインは彼の言葉に特に応えることもなく、苦笑いを返事にして横を通り過ぎようとした。そこへまたも村長の家に入ってくる人影があった。

「あ、クライン君！大丈夫だった？怪我はない？」

声を掛けてきたのは、商隊の紅一点、エマ・レームクールだ。年はクラインよりも5つ年上で、何かと揉めるデニスとマハトの仲裁役として、道中散々助けても

らっていた。

商隊の中で一番大人びていて、さながら商隊のお母さんのような存在だ。

「大丈夫です！すぐに帰還したので・・・！」

クラインは若い女性に対する免疫が無いのか。いつも対応にはドギマギしてしま
う。

これでも、火竜襲撃の一連の事件のときは、必死に守り抜いた女性である。まさ
に狩場での雄々しい姿勢は、今のクラインには到底見られない。

「また行くんだよね・・・？」

心配そうな声と顔を向けてクラインに問いてきたが、甚だ困る態度ではある。

「もちろん・・・！そうしないと商隊の皆さんも仕事ができないので・・・」

「そうだ。お前らが失敗したら、俺達も巻き添えを喰らうんだ」

後ろにいたデニスがやや妬ましい声質でクラインに言った。

道中で感じたデニスとエマの特別な関係性は実は皆無で、デニスが一方的にエマ
に恋心を抱いているようであった。メタペタットからやってきた商隊の中で唯一の
同世代の女性であるエマを、この自尊心の高いリーダーが意識しないわけがない。

対するエマは、元の性格が優しいのも起因して、何かと周りに勘違いさせてしまうのかもしれない。救われないデニスを遠目から見て少し不憫にも感じていた。

「全力を尽くしますよ」

クラインはそうとだけ応えて、エマに軽く会釈をして村長宅を後にする。

出ていったクラインの背中を見送ったエマは、今度は厳しい表情でデニスに向きなおる。

「デニス！なんでクライン君たちにもうちちょっと優しくできないの？」

少し厳しめの口調でデニスに説教をするエマ。その表情を見てデニスは冷や汗を垂らしながら、しかしまっすぐとエマを見つめる。

「俺たちの・・商人の仕事も同じくらい過酷なんだ・・」

エマはそのデニスの凜とした目を受け止めて小さく息を吐く。

「そんなわかりきったこと・・」

「世の中は何かとハンター中心だ。あいつらがいないと、世界は成り立たないみたいなことばかり。でも俺たち商人が物資を調達して供給していかないと、あいつらだって狩りに出られないんだ！」

デニスの本心とでも言うべき言葉。

確かに、この世界はハンターの活躍によって広がりがつつある。しかしその裏では様々な職業の人間が助け合い、共に発展を遂げている。

ハンターが使う罾や道具などの物資を提供する商人。武器の生産や加工を行う鍛冶屋。狩りがより有利になるために研究をする生態研究科などなど。

それぞれが役目を全うし、共存を続けている。人間社会もまた、自然と同じように成り立っているのだ。

「ほっほっほっ！若いのお」

奥で1人、取り残されていた村長がやっと口を開いた。思えばここは村長の家の中だ。それぞれ村長に用が合ってやってきたのに、気がつけば全く違うことに気が向いてしまっていた。

仕事しよう。デニスはそう思い、改めて村長の近くへ向かう。

「少し訪ねたいことがあります」

ーレクサーラ広場ー

レクサーラは《レクセ海》という海に面した村で、漁業にも富んでいる。

他地方から連絡船も出ており船が停泊するための《レクセ湾》も存在していた。ここでは海外との交易が盛んで、様々な物資が運び込まれている。おかげでレクサーラは物資にそうそう困らない村となっている。

しかし、現在レクサーラ側の物資困窮により、交易はそこまで盛んには行われていない。やってくる商人も、減っており全盛よりもかなり衰えているようだった。クラインは、とりあえず片っ端から出店をまわり、必要な物資を調達していた。クラインが目当てのものを探していると、食べ物を扱う店の前で、一人見知った顔が見えた。

「アントンさん！」

デニス商隊の荷車を牽くアプトノスの世話やガイドを行うアントンが、その声に気が付きクラインに顔を向けた。

「やあ！クライン君！どうやら無事だったようだね」

「おかげ様で、ところで何やっていますか？」

クラインがつい声を掛けたのはアントンが店の前で困り果てた顔を浮かべていたからだ。

「いやあ、まいったよ。実は“ププ”のご飯が無くて参っててね」

“ププ”というのは、アントンが世話をしているアプトノスだ。

アプトノスは時として、ハンターの非常食となる傍ら、荷車などを牽くための動力源となることがある。

ハンターであるクラインからしたら、“アプトノスの餌”という言葉に違和感を覚えるが、アントンは心底困っているようだった。

「アプトノスは草食なんだけど、ここらへんって草木が自生しないだろ？砂だらけでさ。念の為、村を出る時に牧草を詰んできたんだけど、ここまで滞在すると思っ
てなくて」

『俺たちが失敗したから・・・』

クラインは内心そう思ったものの、特に言葉に出すことはしなかった。

「いや！君たちが依頼に失敗したからとかじゃないよ！まさか物資がこんなになくなっていてなんてね・・・」

それも今のレクサーラ一帯の現状だ。どちらにせよ、クラインたちは一刻も早くこの問題を解決しなくてはいけないようだった。

「あ、この言い方も君たちハンター本意になっちゃうね・・・」

気まずそうな顔を浮かべたアントンは、次に言葉を発した。

「リーダーはあんなだけど。僕もエマちゃんやウツツも君たちのことを悪く思っていないから。ハンターは必要不可欠な仕事だからね」

「仕事・・・」

「僕たちも、世の中を良くしようとして、君たちハンターに頼ってばっかだしね！」

世の中には価値観というものが、たくさんあるんだなと、クラインは実感していた。ハンターを嫌味に扱うデニスに対して、エマやアントンなど、それぞれの役割を理解している。

みんなこうであれば・・・そんな風に思ってアントンの言葉を聞いていた。

「ところで君も、用があつてここに来たんでしょ？僕も探すの手伝ってあげるよ」
「本当ですか！」

こういったほんのちょっとした優しさが嬉しくもある。村にいるときはあまり関わりを持たなかった人たちと、この旅を通して絆のようなものが芽生えている気がする。

ただ1名を除いては

ーレクサーラ ハンター宿場ー

ハンター宿場は広場のすぐ隣に存在する。

レクサーラ自体そこまで広くないため、様々な区画が隔てがなく存在し、砂漠岩地へとやってくるハンターたちが宿泊するこの宿場も非常に密集して存在する。

10件も無い宿屋が点在し、クラインとマハトはその1軒を利用してる。

村長の家から帰ってきたマハトは宿屋につくなり、トレーニングを始めた。大剣という大きな得物を使っているため、日々のトレーニングは欠かせない。

狩場に移動する際、陸路に行くことになるのだが、長くて半月かかることがほとんどだ。その間、大剣を振るっていないと、いざ狩猟する時にうまく武器が扱えなくなってしまう。

ハンターは各々、日々の地道なトレーニンングは欠かさず行うのが常だ。武器掛けにかかった自慢の大剣《ブレイズブレイド改》を横目に、腕立てを始めた。

『俺たちがなんとかしないといけない』

今、この宿場を利用しているハンターはマハト達以外、誰もおらずその他はデニス達商隊や、その他旅の途中によっている人達であった。

先の一報で、ギルドにはすでにモンスター被害の件は報告済みのはずだ。それでもやってきたハンターがマハト達であるところを考えるとミナガルデに腕利きのハンターがいないか、それよりも重大な依頼があるのであろう。

なにはともあれ、明日のマハト達の働きにより、今後のギルドの評価も変わるはずである。

砂漠の異常事態を解決したともあれば、間違いなく注目はあびることであろう。それから商隊達の動きもかかっている。

デニスの態度を気にしたわけではないが、少なくとも自分たちが解決しないことには、デニス達商隊も、物資の調達ができない。

それはつまり、村の経済にも関わってくる。ハンター以外のモンスターと戦う力がないもののために、自分達が立ち向かうんだという使命感を抱えていた。

ーギィイ

宿屋のドアが開き、一人の男が入ってくる。

「お、トレーニング中ですかい！邪魔しちゃったね」

入ってきたのは商隊のメンバーであり最年少のウッツだ。ウッツは少し大雑把な性格であるが、人当たりの良さや、元ハンターとしての経験持つことから、現地調達の際は小型モンスターの対応を彼が行う立場にある。

「ッ・・・！」

そのままの姿勢で、マハトはウッツを確認した。

ウッツ他商隊の男は皆、同じ宿屋に泊まっている。マハト達に充てがわれた宿屋は、2階建てで一回はキッチンなどもある、非常に広い宿屋だった。

もちろん、あの嫌なデニスも同じ屋根の下で過ごしているわけなのだが、顔を合わせるくらいであれば狩りに出ていたほうがよっぽどマシであった。

マハトは一通りのトレーニングを終えてインターバルを取るため、床に座り込む。
「ふうっ」

息を整えていると、ウッツは近くの椅子に座り、マハトと掛けている大剣を眺めていた。

「いい武器だ・・・」

そう言って目を細くし、どこか寂しそうにマハトの大剣を眺めるウッツ。

「確かあなたもハンターだったんでしたっけ」

「そうだよ。現役の際は君と同じ大剣を使ってたんだ」

レクサーラに向かう荷車の中でも思ったがウッツは非常にガタイが良い。商隊はそれぞれ役割分担が行われ、全てを統括管理するリーダーであるデニス。

会計や物資の個数管理などを行うエマ。

荷車の整備や荷車を牽くアプトノスの世話をするアントン。

そして、このウッツはモンスターに対する知識があることから、現地調達の際に小型モンスターなどを追っ払う用心棒件、狩場での指南役をしていた。

こういった元ハンターが商人をすることは珍しくない。しかし、非常に年齢が若いことは珍しかった。

「怪我をしたって？」

「そう！あいつは強かった。メタペットでハンターをしていたとき、大きな水竜にやられたんだ」

《水竜ガノトトス》

主に水場を縄張りとし、魚の形状をした大きな魚竜種に属するモンスターだ。同じ魚竜種に、マハト達が先に戦ったドスガレオスが含まれる。

「密林に現れたアイツを狩りに行ったんだけど、上手いこと返り討ちにあってね。そこから左半身が麻痺になって、今じゃ走れやしない。」

そういつてウツツは小刻みに震える左手を出した。

「・・・」

マハトは黙ってその様子を見ていた。

「動けなくなったとき、俺は死を覚悟した。だけど、あいつは倒れた俺を見てからそのまま水の中に戻っていったよ」

右手で頭をかく動作をしてやれやれと苦笑いを浮かべた。

「それから、身体が不自由になった俺は、商人になったってわけ。一応右手で武器を持ってなくはないから、用心棒的なこともしてるけどね」

スクツと立ち上がる動作も、よく見ると左足をかばって立ち上がっているように見えた。

「君もあのリーダーには相当嫌気がさしているだろうけどね。多めに見てやって

よ。」

「え？」

あのリーダーとはもちろんデニスのことを指す。デニスのハンターに対する異様なまでの嫌悪は原因はなんであれ、心底参ってしまった。

その様子は、他の正体メンバーも重々承知なのだろう。唯一止めているのがエマなので、他のメンバーも同じように思っていた。いや、アントンに関してはアプトノスの上なので、中の様子など気にはならないのだろうが。

「俺はあの人のことは尊敬しているぜ。商人としては相当できる人だと思ってる。だからあの人の下で働いているのさ」

ちよっとしつこいくらいだけど・・。そう言い終わって、ウツツは部屋の奥へと戻ってしまった。

『尊敬・・？まあ、商隊のリーダーを任せられるくらいなんだから、それなりにできるんだろうけど・・』

少なくとも商隊のメンバーはデニスを慕っているようだった。言ってしまうえば、マハトはまだデニスのほんの一部分しか見ていないのだから、もっと深いところ

で、何かしら彼なりのいい部分があるのかもしれない。

マハトはデニスの憎まれ口を叩く顔を思い浮かべた。

『やっぱりムカつく・・・!!』

―翌朝―

早朝、必要な装備を仮宿で確認をしているクラインとマハト達

「全然アイテムが足りない…」

アイテム袋を確認し、その素材の少なさに落胆するクライン。

昨今の物資困窮により港の市場には十分なアイテムが用意されていなかった。

ドスガレオスに必要な不可欠な音爆弾

その材料となる爆薬の基である火薬草がたった3つしか手に入らなかった。

「それに薬草だって・・・」

回復薬の基となる薬草すら不足している事態である。いかに村の流通が豊かで

あったかをここに来て痛感したクラインとマハト。

そこへまだ日が昇る前のクライン達の仮宿へと訪れる人物がいた。

建て付けの悪いドアが音を立てて開く。

「デニス……！」

クライン達の宿にやってきたのは、ココット村から一緒に来た商隊のリーダーであるデニスだった。

「ふん……大方、物資が揃わなくて困っているところだろう？今のこの村の現状を考えたらココットと同じ流通量があるなんて到底考えるわけないだろう？」

そう言ってデニスが差し出したのは一枚の地図だった。

「これって砂漠の……？」

地図を見るとそれはデデ砂漠全体の地図であった。よく見ると、ただ地形を表したのではなく、各所に葉草の名前や虫の採取ポイントなど、手書きで記入されていた。

「これってまさか……デデ砂漠の採取ポイント？」

「君たちはこの砂漠のことに關しては素人同然だろ？シルトン丘陵ならどこに何があるか分かっているだろうが、砂漠の採取ポイントなんかろくにわかるわけがない」

いつもの憎たらしい笑みを浮かべながら、デニスはクラインとマハトに向かって言った。

「持ってけ。現地で集めれば、なんとかなるだろ」

いつもと変わらない表情で言ったデニスが少し癪だったものの、クラインは横からこれを受け取る。

「お前らが失敗したんじゃ、俺たちも村長たちに向ける顔がないからな。くれぐれも失敗はするなよ」

「けっ」

マハトは喧嘩腰にならないまでも、一瞥してすぐに馬車に向かった。

「ありがと、きつと役立たせるよ」

クラインもデニスの配慮に最低限をお礼を言った。

デニスは軽く片手を上げてクライン達の馬車を見送った。

—砂漠岩地—

ベースキャンプから南に進むと、すぐに大きな砂漠地帯へと出ることができ、エリア2と指定されている広大な砂漠地帯では、砂竜ガレオスが砂の中を及びま

わっているのが見える。

今回の狩猟の目的はこの親玉となる砂竜 $\searrow$ ドスガレオス $\searrow$ だ。魚竜種に分類されるモンスターで砂地を生息地としている種類で、砂竜の分類からもわかるようにドスガレオスとガレオスの生物種的な区別は特に付けられていない。

通常個体のガレオスよりもひと際大きい個体を総称してドスガレオスと定義付けられ、ガレオスの変異体であるというのが、生物学的な見方だ。

とはいえ、個体として見ると差は大きく、個体の大きさもさることながら、寿命も戦闘能力もおよそ倍に跳ね上がっているのがドスガレオスだ。長く生きた種がドスガレオスとなるのか詳しい生体についてわかっていない部分も大きい。

「どこにいるかわかんないね」

クラインは砂漠を一望し、目的の個体がないことを確認した。ガレオス種は主に砂の中を移動するモンスターで、その違いを砂から突出する背びれで判断するしかない。ドスガレオスは背びれも大きく、黒ずんだ体色をしているため、背びれだけで判断することは可能だが、普段砂漠で狩りをしないクライン達が判断するのは難しかった。

「ああ、油断はしない方がいい。慎重に行こう。」

そう言い、マハトはいつモンスターが襲ってきてもいいように、得物の柄に手をかける。

様子を窺うように両名は慎重にガレオスの背びれの動きを観察していた。このエリア1には全部で3体のガレオスが回遊している。ふと、1匹のガレオスの動きが砂の中で止まった。

ジャリッ：

砂を踏む音に反応するように、残り2匹のガレオスもクライン達の方角を向く。

「気づかれたな…！」

「行くよ…！」

クラインとマハトは同時に得物を抜き放つ。

ドスガレオスとの戦闘の前に、余計な体力を消耗してはいけないが、本命との戦闘中に厄介なのがこういった小型モンスターだ。

後の戦闘を少しでも有利にするためには、小型モンスターの退治も有効な手段である。お互いハンターとしてそれなりに経験を踏んできたからこそ、その厄介さは

よく知っている。

ガレオスとの戦闘は普段相手にしているランポスとはまた違った立ち回りが要求される。ガレオス達は砂に潜み攻撃を行う。

体内に「砂塵袋」という内臓器官をもっており、砂中を泳いでいる際にこの砂塵袋に砂を溜め込んでいる。これを口蓋から分泌される特殊な粘液で固め、圧縮された砂ブレスを吐くことができる。それがガレオスの主な攻撃手段となる。

砂中を縦横無尽に移動し、四角から砂ブレスによる攻撃をしてくるため、このエリア1はガレオス達にとって格好の場所となっている。

そしてもう1つ注意すべきなのは、ヒレに持つ微弱な麻痺毒だ。この麻痺毒は剥ぎ取ってもすぐ効能が失われてしまうほど、弱い毒性だが知らぬ間にヒレによる攻撃を受け続け、気が付いたら全身麻痺に侵されていることもあるため、油断はできない。

クラインとマハトは、それら情報を事前に仕入れて、今回の狩りに臨んでいる。しかし、理解はしても実際の狩りでは何が起こるかかわからない。

予期せぬ事態に見舞われることもある。

「マハト……！」

クラインが異変に気付き叫んだ瞬間。これまで相手にしてた3匹の倍ほどの体躯を持ったドスガレオスが砂上に現れた。縦横無尽に砂中を及びまわるガレオスを追うのに精いっぱいになって、いつ近づいたのかわからなかった。

「きやがった……」

ドスガレオスと対峙することになったマハト。イヤンクックよりも少し大きい巨体。通常のガレオスよりも黒くくすんだ体色。倍近い巨体もさることながら、砂塵袋もヒレの麻痺毒も全てが倍の威力となっているガレオスの親玉がマハトの眼前に現れたのだ。

「こいつ、いつの間……？」

クライン達の周りにはまだ3匹のガレオスが残っている。その状態で初めて対峙することになるドスガレオスを前にして、一瞬身体が硬直する。これまでイヤンクック程度の飛竜なら討伐したことのあるマハトとクラインだったが、やはりまだ経験の差では歴戦ハンターのそれに劣る。

マハトは後方に飛ぶように転がりながら、ドスガレオスと距離を取った。同時に

ドスガレオスは砂中に潜り込み、ヒレだけを出してこちらの様子をうかがっているようだった。

ガレオス種は目が退化しており、聴覚のみで得物を補足する。それゆえに敏感になった聴覚で人の呼吸音やわずかな衣擦れすら感知すると言われている。

目が見えないからと侮ると、痛い目を見るのがこのモンスターの特徴だった。だが、それゆえに弱点もある。

「これで……！」

遠方にいたクラインはマハトが窮地に陥らないようサポートに徹する。ポーチから音爆弾を取り出し、それを放り投げた。数秒置いて、耳をつんざく高周波が辺りにこだまする。「爆薬」と「鳴き袋」を調合することで作られるそのアイテムはガレオス討伐には有効なアイテムだ。

その音に驚いて、ドスガレオスを始め、辺りにいた他3体のガレオスも地上に飛び出る。

「いまだ……！」

ひるんだ隙を見て、一気に畳みかけるクラインとマハト。マハトは大剣ブレイズ

ブレイドを振りかざし、ドスガレオスの首めがけて一気に振り下ろす。

切れ味は十分あるものの、やはりこの巨体となると鱗もすっかりしていて、刃が通らない。手ごたえは感じているものの、致命傷を与えるまでには至ってはいなかった。

クラインが事前集めた情報から、ドスガレオスの最も柔らかい部位が首であることが分かっていたものの、ここまで致命傷が与えられないかとマハトは焦る。

音で怯むと言ってもほんの数秒だろう。その際にある程度の傷を負わせて置かないと、狩猟が長引くだけだ。

マハトがドスガレオスを攻撃している間、クラインは他3匹のガレオスの討伐にかかる。慣れない狩場で慣れないモンスターを相手だと、間違はなく苦戦を強いられる原因となるであろうガレオス。

それらを確実に仕留めておくことに専念した。これが2人以上で行う狩りの利点だろう。役割を分担することで、より狩りが効率的になる。ましてや大振りの大剣と小ぶりの片手剣では役割も大きく変わってくる。

小回りの利く片手剣では、相手の隙をつき、懐に入って攻撃を食らわして回避す

るスタイル。

対して大剣は一撃離脱が主な立ち回りだ。狩りの基本はヒットアンドアウェイだが、扱っている武器によって立ち回りが大きく変わる。

もっぱら片手剣を扱うクラインはこの場合、小型討伐やサポートに専念する機会が多かった。大きな隙をついた際に、マハトの大きな一撃で一気にモンスター体力を奪っていく先方。

これがクラインパーティの主なやり方だった。

砂上をのたうち回るガレオスに止めを刺したところ、ドスガレオスが大勢を立て直してきた。

それを見かねてクラインはマハトの反対方向に走る。ドスガレオスの尻尾方向に陣取り、マハトから気を引こうという作戦だ。それを見たマハトも合わせるように、足音を大きさに慣らす。

どの生き物も、挟み撃ちにされた動揺する。攪乱を狙った作戦だ。

だが、彼らには一点失念したことがあった。

ズザザザッ

ドスガレオスは特徴的な頭を砂中にねじ込み、一瞬にして砂の中へと潜り込んでしまった。ズズンツと足元が大きく揺れて、身体がこわばる。

直後、マハトの足元から勢いよく飛び出したドスガレオスは、体重100キロ近いマハトをやすやすと放り投げて、半身を砂から突き出していた。その後、クラインを直視した方と思うと、口腔から砂の塊を射出する。

身体が緊張状態にあったため、すぐに反応できず、体制が不完全なまま盾でこれを受けるも、体中に衝撃が走る。

気絶したマハトとクラインをよそに、ドスガレオスはエリア1を後にした。

―ベースキャンプ―

ハンターギルドではハンターの狩りの助けとなるよう、様々な補助を行っている。このベースキャンプも狩場付近でモンスターが入り込まない場所に設営され、狩りの準備や休息の場所として設けている。

「にゃーにゃー」

ネコタクと呼ばれるギルドと契約を交わしたアイルーお手製の人（猫）力車でベースキャンプまで運ばれるクラインとマハト。

ドスガレオスの猛攻に圧され、あえなく倒れることになった両名。全身に痛みが走るが、ネコタクに揺られてそれが余計に負担だった。

乱暴に地面に転がり落とされたクライン達は痛みを徐々に慣れさせながら、起き上がる。

「クッソ……！」

拳で地面を殴り頭の鎧を脱ぎ捨てるマハト。地面を転がるランポスヘルムの音だけが不気味なほど静かな昼間のベースキャンプにこだまする。

「やっぱり俺達にはまだ早いのかな……」

リオレウスと対峙した時の絶望感が身を支配していたクラインが、口にした。

「勝てない相手じゃないんだ……。武器も防具も悪くねえ。あとはためえの実力だ……」
そういって自身をたきつけるマハトだったが、あの巨体の体当たりをもろに受けたのだ。身体にはそれなりにダメージは入っているはず。

「とにかく治療しよう。わずかとはいえ、薬草は持ってきたんだ」

クラインがポーチの中を漁り回復薬を取り出しベースキャンプに戻る。この回復薬は普通に飲んでも即効性の治療薬として外傷によるダメージも即時快復すること

ができる。さらに温めることで吸収性が増し、効果がまた数段上がるようになってくる。

そのため、ベースキャンプ内では土瓶で温めておくことで、即時回復薬に使うようにしている。

しかし、今回持ってきた回復薬の数量は少なく、クラインとマハトが持ち出すよ
うで合計5個しかない。クラインはその内2個だけを常備して、ベースキャンプ
にはそれぞれ2つずつ置いてある。

10個にも満たない不十分な数であり、未だ未知のモンスターのため、この数で
は正直不安だった。

ベースキャンプに戻って、土瓶で温めて置いた回復薬を呑み始めるクライン。幸
い、外傷は少ないのでこの回復薬を飲んでしばらく休めば多少は体力が回復して
くるはず。

簡易椅子に腰かけ、ぼんやりとベースキャンプの火を見やるクライン。ゆっくり
とベースキャンプに入ってくるマハトを確認した。

「クライン……。やっちゃまった……」

そういってマハトはポーチの中からおもむろに取り出した、割れた瓶を見せた。

「まさか、さっきのドスガレオスの攻撃で・・・？」

マハトが3個持っていた回復薬の全てが、ダメになってしまった。瓶は粉々に砕け、肝心の液体がポーチに染みついてしまっている。

ハンターが常用するアイテムポーチは麻袋の中にさらに特殊な衝撃吸収材が入る2層構造になっている。そのため狩り中の激しい動きにも耐えられるようになってくるのだが、今回は当たり所が悪かったようだ。

「ッ：！とりあえず、コレ飲みなよ」

そういって火にくべてあった土瓶を渡すクライン。憂いた表情でそれを受け取るマハトがなにも言わずに飲み干す。

「幸い骨も折れてないみたいだし良かった。作戦を考えてもう一回・・・」

ガシャン・・・！

マハトが飲み干した土瓶を地面に叩きつけた。よっぽど悔しかったのだろう。デニスも大概だが、このマハトも中々に自尊心が高い方で、今までの好調だった狩りの成果とは裏腹の今の結果がよほど気に食わないのだろう。

「マハト……！今、感情的になっても仕方ないだろ……！俺たちはやるべき事をやらないと」

「わかってる……」

納得はしてないだろうが、マハトは簡易椅子に腰替えて、得物を研ぎ始める。

「確かに、やつの首は柔らかかった。完全に分断するまでにはいかないが、確かに鱗に刃は通ってたはずだ」

そういって、マハトは自分の得物にこびりついたドスガレオスの鱗を指に取って見せた。

砂が混じっていたおかげで分かりづらかったが、ドスガレオスの本来の体色が水色なのだろうか。確かに鮮やかな色の鱗がマハトの大剣にこびりついている。

「動きはわかった。音爆弾を使った作戦のままがいい。だがその後だ」

「やつが地中に潜った後か……」

地中に潜った後の動きは予測が難しい。奴自身、音の錯乱があった後でもあそこまで正確にクライン達の場所を把握し、よく追撃をできたものだと思う。

やはりよっぽど耳は良いのだろう。

「俺たちがエリア1にいたのも、音でバレたのかな？」

「まさか？他のエリアにいたとしても、かなり距離が離れてるぜ？いくら何でも奴の聴力でも無理だろう」

「そうだよ。てことは俺たちが動くかすかな音に反応してたってことか。」

「アイルーを利用して囮にでもするか？」

「ははは！それも有りだ。でもきつとそんなの付け焼刃だ。」

「となると、戦略は変わらないか。」

「きつと、どっかに勝機はあるなんだ…。しっかり敵の動きを観察して…」

そう冷静に分析を始めるクラインを見て、マハトは思うところがあった。

「俺との違いか…。」

「？」

呟いたマハトに顔を向けて、クラインは次の言葉を待った。

「村長にも前に言われたよ。お前は自分の力を過信し過ぎてるって…。一人の力なんてたかが知れてる。だからパーティを組んで狩りをするんだって」

「一人で巨大なモンスターを狩る力もちろん必要だ。だがどうしても適わない敵

も出てくる。そんな時は仲間の力を借りて立ち向かう必要がある……。」

マハトの言葉を聞いたクラインは確かに村長がいいそうだなと納得した。

「チームワークってやつね……」

「クライン……。お前の力が必要だ。あいつを倒すための戦略を……」

そこまで言ったマハトの言葉を遮るように、クラインは支給品ボックスの中から一枚の紙を取り出した。

「俺とマハトだけじゃないよ。もう一人いるだろ？ 仲間が」

クラインが手にしたのは狩りに出る前にデニスからもらった砂漠岩地の採取ポイントの地図だった。

「まずは体制を整えよう」

— エリア 2 —

小型の魚竜ガレオスが砂漠を優雅に泳いでいるの確認する。

数はおそらく3匹。その3匹とは別ににひと際大きなどす黒いヒレも回遊していた。

クラインはそのヒレめがけて手に持った音爆弾を放り投げた。手から離れてすぐ

さま耳をふさぐ。

キーンと強烈な高周波がこだまする。耳をふさいでいても、不快な感覚が襲ってくるほどの甲高い音が砂漠一帯に響き渡る。

この音に反応して砂漠を泳いでいた複数の魚竜が砂上に飛び出してきた。

突然爆音に襲われることで、砂上をのたうちまわるドスガレオスに向けて、クラインとマハトは互いの得物で一斉に攻撃を加えていく。

その巨体ゆえ、面と向かって相對すると一撃離脱の攻防になりがちだが、この灼熱の砂漠において長期戦はこちらの体力を奪うことになる。

短期決着のためにクライン達は音爆弾による猛攻撃を仕掛けるように立ちまわっていた。

肉質が特に柔らかい首部分をマハトの大剣による殴りつけるように切る。いくら重量のある大剣といえどもモンスター首の首を一刀両断するほどの威力もないため、表面から徐々に削り切りダメージを与えていくしかない。

クラインは、次に弱点と思われるヒレの部位に攻撃を与えていく。

1度、モンスターの動きを見ていたことによりある程度、冷静な立ち回りが可

能となっていた。

やがて、ドスガレオスが体制を立て直し、立ち上がる動作に移る。

「クライン！」

マハトの掛け声に反応し、クラインが距離をとる。

背中に陣取っているクラインは場所的にドスガレオスの動きが把握しづらい。マハトが先導し、合図を送る必要があった。

距離をとった2人は同時に回りのガレオス数匹にも気を配る。

ドスランポスなどドス系統のモンスターは基本的に群れで行動をする。イヤンクックやリオレウスとの大きな違いはそのチームワークだった。

だがそれも同じ条件。クラインとマハトもパーティで狩りをしている。お互いがお互いの死角や弱点を補うように立ち回らなければならない。

「マハト！左後方だ！」

マハトは振り返るより前に、左前方に振り替えりながら大剣を振り下ろす。振り上げと同時にガレオスを視界にとらえ、相手が攻撃を仕掛けてくるより早く、その脳天に思い一撃を食らわす。

凶悪な鉤爪をもったマハトの大剣ブレイズブレイド改がガレオスの脳天を貫く。「回転攻撃だ！距離をとれ！」

後方から聞こえるクラインの声を確認し、マハトは振り下ろした剣の重さに任せ、前転する。

巨大なしっぽの風圧を感じ、視線をドスガレオスへと向き直すマハト。気が付けば他のガレオスはすでに砂中にもぐって回遊を始めていた。

ドスガレオスほどの大きなヒレを持っていないので、一度見失うと探すのが困難になる。さらにこの広大な砂漠だと、より一層だ。

だが小さい分、1体1体の脅威は小さいともいえる。

意識はドスガレオスに向けておくべきだ。

そういったクラインの声をマハトは思い出す。

次の攻撃の予備動作に気を向けていると、ドスガレオスは軽い助走をつけてジャンプに頭から砂中に潜っていく。

こうなったら逆にチャンスだった。

クラインがポーチに手を突っ込んだのを確認し、マハトもある物を手を取るため

にポーチに手を入れる。

ドスガレオスの大きなヒレはある一定のルートをとるようになっていた。

いくら柔らかい砂だからと言っても、地上の獣道と同じように砂の中にも通りやすいルートがあるのだろう。

先の戦いでクラインが発見したこの規則性を利用に、進路上に待ち構えるクライン。

狙い通りのルートに差し掛かったタイミングで、もう1発の音爆弾を投げた。

直後、あの不快な甲高い音があたりを振動し、驚いたドスガレオスが砂上に姿を現す。

マハトとクラインは駆け寄りながら、怪力の種を1つ口に放り込む。

怪力の種は1種食べるだけで経絡エネルギーの流れが活発化し一時的に力を増強できる植物だ。

クライン達は体力回復のために薬草を探すがてら、この怪力の種も同時に採取していた。

デニスが託してくれた地図が無ければ、体力が底をつき回復もままならない状態

で狩りが進んでいたことだろう。

狩りに慣れた森と丘ならある程度どこに何があるのかはわかる。だがここは全く初めての砂漠岩地だ。

ハンターはモンスターを狩る知識と経験以外にも狩場にも精通していないと、巨大な相手と渡り合うのも困難だ。

時に場所の特性を利用し、得物を追い詰めることも狩りの達成には必要だった。怪力の種は、この過酷な砂漠岩地での狩りをより短縮するために有効な手段となった。だが、その考えもデニスの地図が無ければ、作戦に組み込まれなかっただろう。

マハトはデニスが地図を渡したときに言った『お前らが失敗したんじゃ、俺たちも村長たちに向ける顔がないからな』という言葉を思い出していた。

「…あいつも一緒だ…」

マハトは小さく声に出して、砂上に出てきたドスガレオスに向かっていた。

—レクサー—

デニスには港に腰かけて水平線を眺めていた。夜になるとうっすらと赤く灯る水平

線。確か対岸には火山地帯があるから、おそらくその影響だろうと考えていた。デニスはまだ火山地帯に行つたことがない。メタペタットで生まれ育ち、近くのメタペ湿密林とこの砂漠岩地、そして今メインとなっているシルクオーレの森とシルトン丘陵くらいしかまだ見たことがない。

一般の人からしたらこの活動域は比較的広い方であり十分だろうとは思ふ。だが、デニスはまだこの目で見たことがない未開の地を思うと、胸が高鳴るのを感じていた。

今でこそ商人をしているデニスだが幼少のころはハンターに憧れた少年の1人であった。

巨大な武器を背負い、未踏の地を踏み歩く冒険者。広い世界を見て歩き、この世界のすべてを見てみたかった

そんな気持ちとは裏腹に、本物のモンスターと相対した時の恐怖感はこのデニスに深いトラウマを残していた。

数か月前に、森と丘でリオレウスと遭遇した際も恐怖で身がすくみ、本来守るべき相手であったエマすら置いて逃げてしまった。

人間が抱える根源的な恐怖の象徴。デニスにとってそれはモンスター以外の何者でもなかった。

そんなことがあるから、ハンターという職業に嫉妬してしまう。

特にマハトはデニスにとって自分が描いていたハンターのイメージそのものだった。

鍛え抜かれ、巨大な身体。背中に背負う大きな武器。そんな逞しい存在に憧れて、それでいて一生叶わないという事実が、デニスがハンターをバカにする由縁だった。

(小さいよな…)

自分が抱えているトラウマや自尊心の大きさについては自覚しているものの、なかなか素直になれない自分がいた。幼いころからなんでも要領良くできていた分、できないことがある自分をなかなか認められない。

「デニス・・！」

柄にもなく港で一人黄昏ていたデニスの背後からエマが声をかけてきた。

その声の抑揚やエマの表情から、ハンター一行が帰ってきたのだろうことは察せ

た。

おそらく狩りは成功したのだろう。

聞けば2人はまだ駆け出しのハンターで飛竜の討伐経験もイヤクツクくらいだと言う。

そんな2人でもドスガレオスが狩れるのか。

やはりまだ嫉妬心を抱いたデニス。おそらく面と向かったらまた嫌味を言うのだろう。

エマに付いていく形でデニスはハンター達がいるであろう村の入り口へと向かう。

『お疲れ！』そんなありきたりな言葉なんか絶対に出てこない。

そしたらあの地図を渡したのは一体なぜだろうか？

デニスはあの時の心情をよくは理解していない。気が付いたら渡していたし、だからといってあいつらに礼を言われたいとも思っていないかった。

やがて村の入り口に近づくとすでに人だかりがあり、その中でも群を抜いて背の高いマハトの頭も見えていた。

『討伐は失敗か?』

漠然とそんな言葉が頭の中を反芻していた。巨大なモンスターに立ち向かう彼らの姿を思い浮かべつつ。

デニスが人だかりの方を見ていると、マハトがこちらに気が付いて人だかりをかき分けてこちらに向かってきた。

何か憎まれ口を叩かれるか?

そう思い、何となく気まぎれになった視線をマハトの足元に向ける。

あちらでゆっくりと洗うことも難しかったのだろうか。グリーヴは血で固まった砂がこびり付いている。

それ以外にも防具のいたるところには、出発前には見なかった損傷がいくつか見られる。

やはり無傷は難しいのだろう。それが狩りだ。あんな巨体と相對するのだ。無傷で帰ってこれる方がすごい。

そう考えているとマハトの巨体がデニスに近づいてくる。

「ありがとな」

自分よりも頭二つ分ほど大きな年下のハンターが自分にそう声をかけてきた。

「…!？」

声にならずにデニスはマハトを見上げた。

マハトの顔と同じ高さに、出発前にデニスが渡した地図をもつてマハトが言った。

「お前のこの地図があったから窮地になっても何とかなった」

自分が言われているのか？と疑うほど予想だにしない言葉だった。

信じられず、様々な思考がデニスの頭を駆け巡るのがついぞそれが固まることはなかった。

「色々バカにしたよ。商人だからハンターのことなんか何も知らねえとかさ。」

マハトは言葉を続ける。

「村長が言っていたチームワークの意味も、ハンターだけの話かと思ってたけど、よく考えてみたら武器や防具を作ってくれる職人がいて、アイテムをそろえてくれるお前ら商人もいる」

「そういう手助けがないと、俺たちはまともに狩りなんかできやしねえ。俺はちょっと前まででめえの力さえあれば、ハンターは務まると思ってた。」

「あ……の……」

デニスの中で古い記憶がフラッシュバックする。密林で遭遇した巨大な飛竜。それからモンスターがトラウマになり、志半ばハンターをあきらめて商人の道へ進んだ。

本当はハンターになりたかった。

「今回の狩りも俺一人の力じゃねえ。クラインもいたしデニス、お前もいた。」

「お前も立派なハンターだよ」

そのマハトの言葉を聞いた瞬間、栓を外したようにデニスは涙を流した。

別に認められなかったわけでも、褒めてほしい想いも微塵もなかった。

ただ、自分はハンターになれないと決めつけて、勝手に閉じこもって絶望していただけだった。

自分になりたいものに一生なれないと諦めていたからこそハンターと呼ばれたことに対して、得も言えぬ感覚に襲われた。

突然涙を流したデニスに虚を突かれたマハトは戸惑いを隠せない。

「な……なに泣いてんだ気色わりい!!」

周りから見たらなんの脈絡もなく泣き出したし、周りの誰一人としてデニスが泣いた意味が理解できていなかった。

遠目から見えていたクラインも会話は聞こえていないものの『マハトがデニスと口喧嘩して泣かせた』と勘違いさせるのも用意だった。

慌てふためくエマとマハト。そこへ慌てて駆け寄るクライン。

周りもなんて声を掛けたりいいか分からない状態であったが、デニス本人だけは長年の悩みから解き放たれた充足感を抱いていた。

モンスターハンター ～エピソード コ コット～

著者 Patrick

発行日 2022年9月13日

ハーメルン -SS・小説投稿サイト-

<https://syosetu.org/novel/177132/>

本書の内容を無許可で転載・複写・複製することは、禁じられております。